

茨城県教育財団文化財調査報告第246集

出 崎 遺 跡

一般県道上吉影岩間線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成17年3月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第246集

出^で崎^{さき}遺跡

一般県道上吉影岩間線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成17年3月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、21世紀の社会を展望し、県全域にわたる調和のとれた発展を図るため、県内の交通体系の整備を進めています。また、百里飛行場関連事業として、空の玄関口となる百里飛行場の広域利用の促進と、自動車利用者の定時制確保を図るため、各高速道路のインターチェンジからのアクセスルートの整備を計画し、常磐自動車道岩間インターチェンジのアクセスルートとして、一般県道上吉影岩間線の道路改良事業が進められています。

この事業地内には、美野里町の埋蔵文化財包蔵地である出崎遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所から一般県道上吉影岩間線道路改良事業地内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成15年7月及び9月に発掘調査を実施しました。

本書は、出崎遺跡の発掘調査の成果を収録したもので、本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、美野里町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成15年7月1日から7月31日、平成15年9月1日から9月30日まで発掘調査を実施した茨城県東茨城郡美野里町大字張星に所在する出崎跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下の通りである。
調 査 平成15年7月1日～平成15年7月31日、平成15年9月1日～平成15年9月30日
整 理 平成17年2月1日～平成17年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、首席調査員兼班長萩野谷悟、主任調査員長谷川聡（平成15年7月1日～平成15年7月31日）、副主任調査員駒澤悦郎が担当した。
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、副主任調査員駒澤悦郎が担当した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X軸＝＋26,240m、Y軸＝＋43,360mの交点を基準点(A1a1)とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに、小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SK-土坑 SD-溝 SF-道路跡 TP-陥し穴 FP-炉穴
遺物 TP-拓本記録土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品
土層 K-攪乱




3 土層観察と遺物における色調の判定は、土色帖(小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖 9版』日本色研事業株式会社 1989年5月)を使用した。

4 遺構・遺物実測図の表記については、次のとおりである。

(1) 遺跡全体図は縮尺300分の1とし、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次の通りである。

 焼土・赤彩  炉・繊維土器断面  硬化面
● 土器 □ 石器・石製品 △ 金属製品 - - - - - 住居床面硬化範囲

5 遺物観察表・一覧表の表記については、次の通りである。

(1) 計測値の()内の数値は現存値を、[]内の数値は推定値を示した。計測値の単位はcm、gで示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率及びその他必要と思われる事項を記した。

6 「主軸」は、炉を通る軸線あるいは長軸(径)を通る軸線とした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例：N-10°-E)。なお、推定値は[]を付して示した。

抄 録

ふりがな	でさきいせき								
書名	出崎遺跡								
副書名	一般県道上吉影岩間線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書								
巻次									
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告								
シリーズ番号	第246集								
編著者名	駒澤 悦郎								
編集機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029 (225) 6587								
発行機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029 (225) 6587								
発行日	2005 (平成17) 年3月25日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
でさきいせき遺跡	茨城県東茨城郡 美野里町大字張星 21番地の4ほか	08304 — 053	36度 13分 36秒	140度 19分 8秒	25.5 ～ 28m	20030701 ～ 20030731 20030901 ～ 20030930	1,250㎡ 208㎡	一般県道上吉影 岩間線道路改良 事業に伴う事前 調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
出崎遺跡	包蔵地	縄文	陥し穴 3基 炉跡 1基 遺物包含層 1か所		縄文土器 (深鉢, ミニ チュア土器), 石器 (磨製石斧, 剥片)		縄文時代から近世に 至るまで, 断続的に土地 利用された複合遺跡で ある。縄文時代には狩 猟場やキャンプサイト として, 古墳時代前期に は小規模な集落が営ま れ, 住居から祭器的な小 型壺3点が一括出土し ている。		
	集落跡	古墳	竪穴住居跡 6軒 土坑 1基		土師器 (高坏・器台・ 甕・台付甕・壺・罎・ 小型壺), 金属製品 (鉄鏃), 石製品 (砥 石)				
	その他	中世・近世	方形竪穴建物跡 1基 道路跡 1条 土坑 30基 溝 3条		陶磁器, 瓦				

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
(1) 陥し穴	11
(2) 炉跡	13
(3) 遺物包含層	13
2 古墳時代の遺構と遺物	16
(1) 竪穴住居跡	16
(2) 土坑	26
3 中世以降の遺構と遺物	27
(1) 方形竪穴建物跡	27
(2) 道路跡	28
(3) 土坑	28
(4) 溝	33
4 遺構外出土の遺物	36
第4節 まとめ	39
1 土地利用の変遷	39
2 古墳時代前期の住居形態	39
3 第1号住居跡出土の小型壺について	45
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、百里飛行場関連事業として空の玄関口となる百里飛行場の広域利用の促進と、自動車利用者の定時制確保を図るため、各高速道路のインターチェンジからのアクセスルートを整備している。そうした中、茨城県水戸土木事務所は、常磐自動車道岩間インターチェンジから百里飛行場までのアクセスルートとして、一般県道上吉影岩間線の延長と整備を進めている。

平成14年6月24日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道上吉影岩間線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は平成14年7月11日に現地踏査を、平成14年11月18日～20日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成14年12月24日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。

平成15年1月17日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に出崎遺跡が所在する旨回答した。そして計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成15年2月10日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道上吉影岩間線道路改良事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成15年2月17日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、出崎遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成15年7月1日から平成15年7月31日、平成15年9月1日から平成15年9月30日まで、出崎遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

調査は、平成15年7月1日から平成15年7月31日、平成15年9月1日から平成15年9月30日までの2か月間実施した。以下、調査の経過について、その概要を表で示す。

工程	月	7月	9月
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 写真撮影 整理			
補足調査 撤収			

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

出崎遺跡は、県の中央部、東茨城郡の南部に位置する東茨城郡美野里町大字張星21番地の4ほかに所在している。

国道6号線の両側に広がる美野里町は、町域が東西約10.5km、南北約8.5kmで、ほぼ方円の形状を呈している。地勢は平均標高約24mとほぼ平坦で山はなく、洪積台地と河川流域の低地からなる。台地は石岡・新治台地と呼ばれ、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部である。これらの台地は、数多くの中小河川により開析され、樹枝状の入り組んだ複雑な地形を形づくっている。主な河川は筑波山系に源を發し、町の西から南にかけて町境を流れる園部川と、愛宕山麓を源流として、町北域を南東流する巴川がある。両河川に沿って發達した低地と、町内に点在する溜池を源とする細流に沿って樹枝状に入る谷津は、ほとんどが水田となっており、町の穀倉地帯となっている。

台地の地質は、下部から第四紀洪積世下総層群下部の地蔵堂層・藪層（15～80万年前）、最終間氷期に形成された古東京湾を埋積した下総層群上部の成田（青灰色シルト）層（12～13万年前）、これを覆う常総層下部の竜ヶ崎層、常総層上部の箱根山の噴火による常総粘土層、その上部に関東ローム層が堆積し、最上部は沖積世沖積層となっている¹⁾。地形の形成に深く関与した園部川と巴川によって大きく開析された流域は、平均標高約5mの沖積低地を形成し、台地との比高は約20mとなっている。また、この二つの河川に挟まれた台地には、溜池を源とする花野井川をはじめとして、いくつもの小河川が發達し、台地を樹枝状に開析している。そのため、いくつもの細長く延びる舌状台地が形成されている。

当遺跡は、町域の西部、美野里町立美野里中学校から南西に約900mの地点に所在し、園部川の支流である花野井川左岸の谷津田を南に望む、標高25.5～28mの舌状台地上に立地している。この台地は南北約580m、東西約480mで、両側に細長い谷津が入り込んでいる。

当遺跡と周辺の土地利用の現状は、台地上は主に畑地び平地林で、花野井川流域の沖積低地は水田である。

第2節 歴史的環境

当遺跡<1>は、縄文時代から近世に至るまで、断続的に土地利用された複合遺跡である。周辺には園部川水系に属し、水利の便に富み、樹枝状に入り込んだ谷津が發達した台地であるため、縄文時代から人々の生活の舞台となってきた。それを裏付けるように縄文時代から近世に至るまでの遺跡が数多く確認されている。ここでは、当遺跡に関連する町域の遺跡を中心に、時代ごとに述べる²⁾。

旧石器時代の遺跡は、現在、チャート製の石刃が表採された鶴田腰巻遺跡^{つるたこしまき}の1か所のみが知られている³⁾。

縄文時代の遺跡は、10か所が確認されている。代表的な遺跡は羽鳥地区の早期の逆瀬遺跡^{さかせ}と中期の中峯遺跡^{ながみね}をはじめ、小曾納川流域に立地する町域最大規模の中期集落跡と考えられる五行台遺跡<5>、沢目川流域の中期から後期の天神遺跡^{てんじん}と東山遺跡^{ひがしやま}など、園部川水系の台地縁辺部に比較的多く立地している。

弥生時代の遺跡は、5か所で、旧石器時代の遺跡に次いで遺跡数は少ない。遺跡の分布は縄文時代と同様で、主に園部川水系の台地縁辺部に立地している。巴川水系では、塔ヶ塚古墳群^{とうがづか}で土坑1基が確認され、県西部や

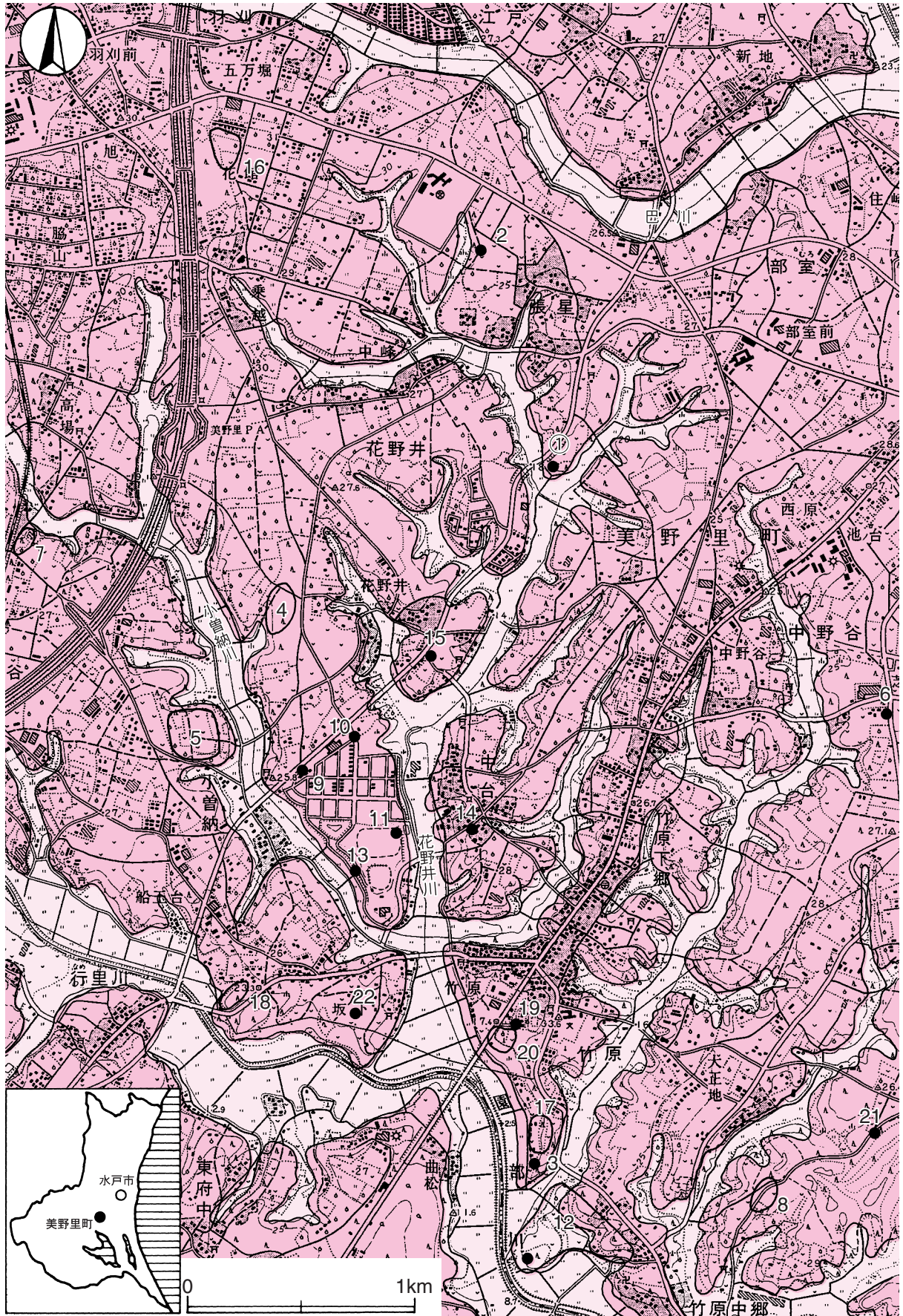
栃木県南部を中心に分布する後期の二軒屋式土器が出土している⁴⁾。町域が県中央部に位置することから、今後、県南部を中心に分布する上稲吉式土器や、県中央部以北を中心に分布する十王台式土器などが発見される可能性は高く、複雑な弥生土器の分布圏の交錯が予想される。

古墳時代になると遺跡数が急増し、27か所が確認されている。遺跡は町域全体に広がり、園部川及び巴川水系の台地先端部に主に立地し、台地中央部に立地する遺跡もわずかながら見られる。27か所の内、集落跡が6か所、その他は古墳及び古墳群とされている。代表的な集落跡は羽黒遺跡<17>や並木新田台遺跡<18>で、園部川水系の台地先端部に立地し、羽黒遺跡は1983年、並木新田台遺跡は1986年にそれぞれ調査され、前期の住居跡8軒、後期の住居跡2軒が発見されている⁵⁾。巴川水系の台地上に立地している古墳は、泥障塚古墳群をはじめとして、石船古墳群、石船台古墳群、行人台古墳群、塔ヶ塚古墳群、鹿久保古墳、明神塚古墳、稲荷山古墳である。中でも泥障塚古墳群は、小型の前方後円墳1基と円墳5基を含む巴川水系の中核的な古墳群と考えられる。園部川水系の台地上に立地している古墳は、羽黒古墳群<3>、神明塚古墳、山神古墳、逆瀬古墳である。羽黒古墳群は、前方後円墳1基と円墳2基からなり、町域で最大規模を誇る1号墳（前方後円墳）は、早稲田大学考古学研究室により墳丘測量が実施されており、5世紀代の築造と推定されている⁶⁾。沢目川流域には、方墳の熊野権現古墳や蝶巣塚古墳がある。また、花野井川流域には、直径約50m、高さ約5mの円墳を含む愛宕山古墳群<4>、直径約30m、高さ約3mの勅使塚古墳<2>や、明生塚古墳<15>などが分布し、当出崎遺跡に隣接する古墳として注目される。

以上の通り、町域には中期から後期に推定される古墳や古墳群が数多く存在している。これは古墳時代中期以降、この地方にも有力な豪族が出現したことを示している。また、この時代の遺跡が町域全体に広がっていることは、多くの集落が営まれ、人々の生活が広範囲に広がり、園部川と巴川水系の低地開発と生産基盤の飛躍的な発達成し遂げられたことを物語っている。

奈良・平安時代の遺跡は、6か所が確認されている。律令制下の町域は常陸国茨城郡に属し、平安時代の辞書である『和名類聚抄』に見える生園郷、白川郷、山前郷などに比定されている。集落跡としては、園部川流域の羽黒遺跡、小曾納川流域の五行台遺跡、沢目川流域の天神遺跡と東山遺跡が存在し、巴川流域では、該期の溝1条が発見された中峯遺跡がある⁷⁾。また、交通関連遺跡として、古代官道と考えられる五万堀遺跡<7>が知られている。この遺跡の南に位置する美野里町大谷と石岡市石岡正上内の間には、平安時代末期に「大矢橋」が存在したことが『吾妻鏡』に記されている。さらに、常陸国府から陸奥国に至る駅路と推定されている友部町仁古田の五万堀古道⁸⁾や、常陸国府から陸奥国に至る最初の駅家と推定されている岩間町安侯の東平遺跡⁹⁾の調査例などから、町域に古代官道に関連する遺跡が存在している可能性は高く、今後の常陸国における駅路研究の進展に期待するところである。

11世紀から12世紀にかけて、町域は常陸平氏の勢力下に入り、涸沼川流域に立荘された小鶴荘の南域と接する茨城郡の公領部として残り、南郡に包括されたと考えられる。その後、南郡は下河辺氏の支配下から、府中の大掾氏の支配下に入り、戦国時代末期には、水戸の江戸氏と大掾氏との抗争が激化し、町域は主戦場と化した。大掾氏は府中城防衛の拠点として竹原城を築いたが、江戸氏を倒した佐竹氏によって大掾氏も滅ぼされ、以後は佐竹氏の蔵入地となった。慶長7（1602）年、佐竹氏の秋田移封後は、宍戸城の秋田氏領となり、正保2（1645）年以後は幕府領となった。寛文11（1671）年以降は、複雑な支配変遷をとげ、昭和34（1959）年、町制施行によって美野里町が成立した¹⁰⁾。こうした歴史の中で中世以降の遺跡は塚が10か所と最も多く、次いで城館跡が6か所、製鉄跡が1か所である。塚は、多くの場合が信仰の対象と考えられ、町域には柴高の六部塚や竹原の一字一石経塚をはじめ、経塚が多く存在している¹¹⁾。水戸街道沿いの一里塚<14>は、町域に4か所存



第1図 出崎遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院2万5千1地形図「石岡」)

表1 周辺遺跡一覧表

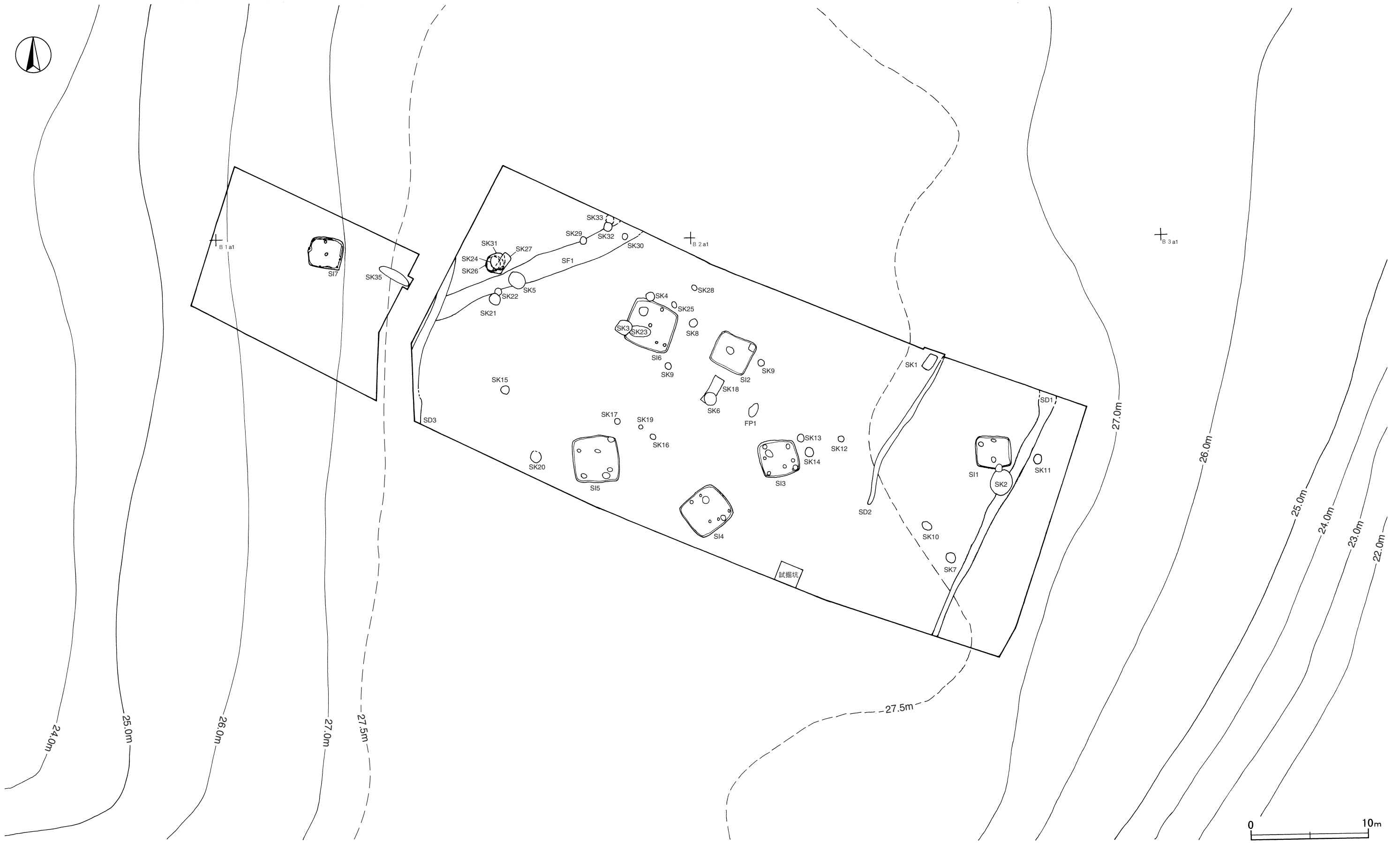
番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近		
①	出崎遺跡		○		○		○	12	竹原城跡								○
2	勅使塚古墳				○			13	中台権現堂経塚群								○
3	羽黒古墳群				○			14	一里塚								○
4	愛宕山古墳群				○			15	明生塚古墳				○				
5	五行台遺跡		○	○	○	○		16	五万窪遺跡								○
6	大塚古墳				○			17	羽黒遺跡			○	○	○			
7	五万堀遺跡					○		18	並木新田台遺跡				○				
8	十三遺跡		○					19	弓削砦跡								○
9	小曾納経塚						○	20	弓削遺跡		○						
10	花野井遺跡						○	21	十三塚				○				○
11	中台経塚						○	22	岩屋権現古墳				○				

在していたが、現在は中台の一里塚が榎木と共に残存している。城館は竹原や鶴田、堅倉など、町域の南部や東部に多く築かれている。永禄2（1559）年、竹原四朗義国が築いたとされる竹原城跡^{たけはらじょうあと}〈12〉や弓削砦跡^{ゆげとりであと}〈19〉は、大掾氏の府中城の支城で、片倉砦跡^{かたくらとりであと}は後に佐竹氏によって滅ぼされた江戸氏が、大掾氏の攻略のために構築した砦である。その他、鶴田城跡^{つるたじょうあと}、高原城跡^{たかはらじょうあと}、富士館跡^{ふじやかたあと}などがあり、羽鳥の五万窪遺跡^{ごまんくぼ}〈16〉は、調査によって室町時代頃の製鉄跡と推定されている¹³⁾。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第2図及び周辺遺跡一覧表中の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 大森昌衛・蜂須紀夫「茨城の地質をめぐって」『日曜の地学』8 築地書館 1979年9月
- 2) 美野里町史編纂委員会『美野里町の文化財・近世代古文書目録』美野里町 1984年3月
茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図(地名表編・地図編)』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 美野里町史編さん委員会『美野里町史 上』美野里町 1989年3月
- 4) 千種重樹『茨城県美野里町塔ヶ塚古墳群』美野里町教育委員会・塔ヶ塚古墳群発掘調査会 1996年3月
- 5) 海老沢稔・佐々木義則・野坂俊之『並木新田台遺跡』美野里町教育委員会 1988年3月
- 6) 早稲田考古学研究室「常陸における古墳の測量」『古代』第56号 早稲田考古学会 1973年9月
- 7) 大賀健・高野浩之『茨城県美野里町中峯古墳-PC工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査-』美野里町教育委員会 1997年3月
- 8) 仲村浩一郎「総合流通センター整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第162集 茨城県教育財団 2000年3月
- 9) 黒澤彰哉ほか『岩間町東平遺跡発掘調査報告書』岩間町教育委員会 2001年3月
- 10) 註3) に同じ
- 11) 能島清光ほか『茨城県美野里町花野井遺跡調査報告』美野里町教員委員会 1976年8月
萩原義照「中台権現堂経塚群調査報告書」『美野里町文化財調査報告書』第6集 美野里町教育委員会 1990年7月
萩原義照「小曾納経塚発掘調査報告(概要)」『美野里町文化財調査報告書』第7集 美野里町教育委員会 1991年3月
- 12) 千種重樹『茨城県美野里町弓削砦跡』美野里町教員委員会 1995年5月
- 13) 伊藤重敏『五万窟遺跡調査報告(2)』美野里町教育委員会 1984年3月
阿久津久「花館ゴマンクボ製鉄跡について」『日本考古学協会第49回総会研究発表要旨』日本考古学協会 1984年5月
美野里町教育委員会『茨城県花館ゴマンクボ製鉄遺跡発掘調査報告書』1985年3月



第2図 出崎遺跡全体図

第3章 調査の成果

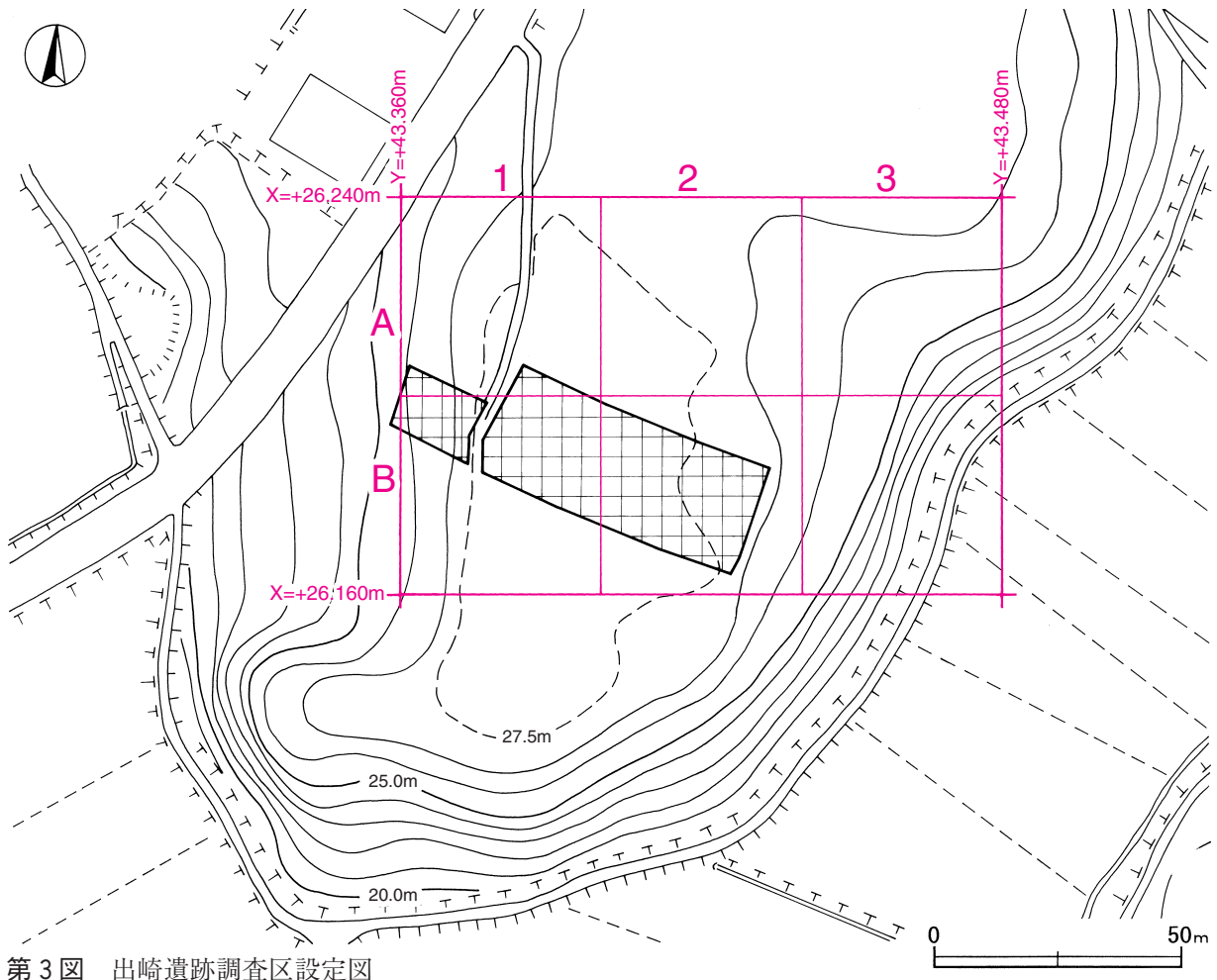
第1節 調査の概要

出崎遺跡は、美野里町の東部に位置し、園部川支流の花野井川左岸の標高25.5～28mの舌状台地上に立地している。調査前の現況は畑地及び平地林であり、調査面積は1,458㎡である。

調査は平成15年7月と9月の2か月間で実施し、竪穴住居跡6軒、方形竪穴跡1基、陥し穴3基、炉跡1基、土坑29基、道路跡1条、溝3条、遺物包含層1か所が発見された。縄文時代の遺構は、陥り穴3基と炉跡1基及び遺物包含層1か所で、古墳時代の遺構は、竪穴住所跡6軒と土坑1基である。中世以降の遺構は、土坑30基と道路跡1条及び溝3条である。

遺跡の主体は古墳時代前期の集落跡で、確認された竪穴住居跡は重複関係がなく、出土遺物なども少ないことから、存続期間の短い小規模な集落跡と考えられる。調査の結果、当遺跡は縄文時代から近世に至るまで、継続的に土地利用された複合遺跡であることが判明した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に3箱出土している。縄文時代の遺物は、縄文土器(深鉢, ミニチュア土器), 石器(磨製石斧, 剥片)で、古墳時代の遺物は、土師器(高坏・器台・甕・台付甕・壺・埴・小型壺), 石製品(砥石), 金属製品(鉄鏃)などが出土している。



第2節 基本層序

調査区南部のB2g2区を中心に試掘坑を設定し、深さ1.8mまで掘り下げて基本土層の観察を行った。土層は14層に分層され、第I・II層が耕作土・旧表土、第III層がローム漸移層、第IV～XIII層が関東ローム層で、その内の第X層が鹿沼軽石層の漸移層、第XI層が鹿沼軽石層の純層、第XIV層以下は常総層（灰白色粘土層）に相当することが判明した。土層の観察結果は以下の通りである。

第I層は、暗褐色を呈する耕作土で、ローム粒子多量、ロームブロック少量含み、層厚は16～20cmである。

第II層は、暗褐色を呈する旧表土で、ローム粒子微量に含み、層厚は2～5cmである。

第III層は、褐色を呈するローム漸移層で、黒色土ブロックを微量に含み、層厚は10～14cmである。縄文土器を包含している。

第IV層は、褐色を呈するソフトローム層で、黒色粒子を微量含み、層厚は5～14cmである。

第V層は、褐色を呈するソフトローム層で、黒色粒子を少量含み、層厚は12～14cmである。

第VI層は、褐色を呈するソフトローム層で、黒色粒子を微量含み、クラックがよく発達している。

第VII層は、褐色を呈するハードローム層で、黄褐色パミス・ガラス質粒子・スコリア粒子を微量含んで締まりが強く、始良Tn火山灰（AT）を含む層に対比され、層厚は5～30cmである。

第VIII層は、褐色を呈するハードローム層で、赤色粒子・黄褐色パミスを微量含んでいる。始良Tn火山灰（AT）を含む層の下の黒色帯であることから、第2黒色帯上部に対比され、層厚は16～30cmである。

第IX層は、褐色を呈するハードローム層で、黄褐色パミス・鹿沼パミスを微量含んでいる。第2黒色帯下部に対比され、層厚は16～22cmである。

第X層は、褐色を呈するハードローム層で、硬く締まり、鹿沼パミス进行中量含んでいる。鹿沼軽石層の漸移層と考えられる。層厚は5～15cmである。

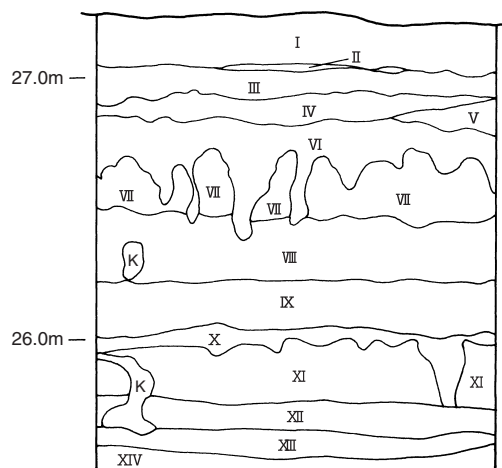
第XI層は、黄褐色を呈する鹿沼軽石層の純層で、粘性は弱い。給源火山は群馬県赤城山で、約34000年前とされ、層厚は8～30cmである。

第XII層は、褐色を呈するハードローム層で、硬く締まり、鹿沼パミス微量含み、層厚は8～15cmである。

第XIII層は、にぶい黄褐色を呈するローム層で、締まりが弱い。

第XIV層以下は、常総粘土層と考えられる。

なお、遺構の多くは、第II層下部及び第III層上面で確認され、第III～VI層にかけて掘り込まれている。



第4図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した縄文時代の遺構は、陥し穴3基、炉跡1基と遺物包含層1か所である。これらの遺構は標高26mほどの台地縁辺部から平坦部に位置し、時期は早期から中期と推定される。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1) 陥し穴

第23号土坑 (第5図)

位置 調査区中央部のB1 b9区で、標高26.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第6号住居跡に掘り込まれている。

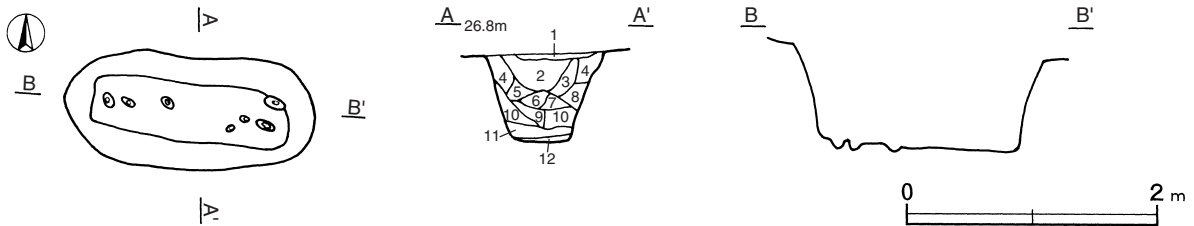
規模と形状 確認した長径1.97m、短径0.91mの長楕円形で、深さは75cmである。壁は長径方向で緩やかに反りながら外傾し、短径方向で直線的に外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、7か所に小穴が穿たれている。長径方向はN-83°-Wである。

覆土 12層からなる。土質や堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック微量	7 褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量	8 褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	9 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化物微量
4 暗褐色	ロームブロック粒子中量	10 褐色	ロームブロック多量
5 暗褐色	ロームブロック少量	11 褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
6 褐色	ロームブロック中量	12 黒褐色	ロームブロック中量

所見 周辺から早期から中期の縄文土器片が出土しているが、本跡からの出土はない。時期は形態から早期から中期の可能性が考えられるが明確でない。



第5図 第23号土坑実測図

第31号土坑 (第6図)

位置 調査区西部のB1 a6区で、標高26.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第24・26・27号土坑に掘り込まれている。

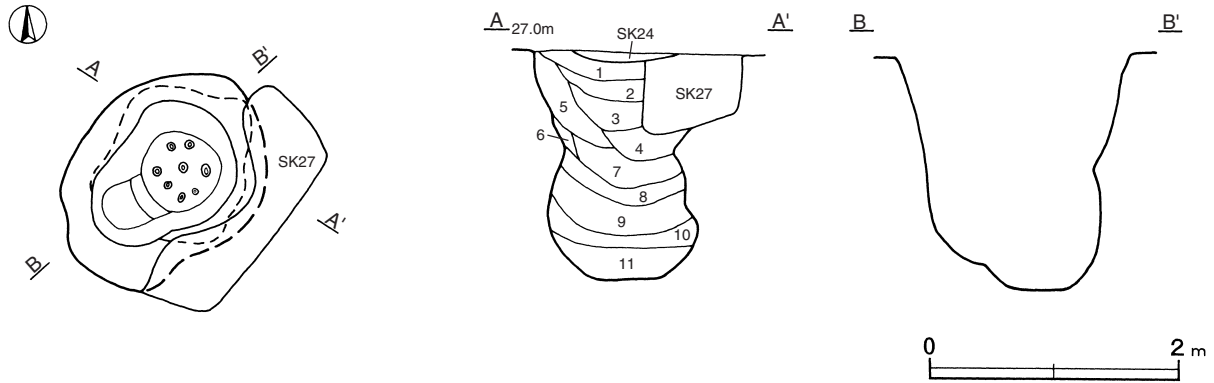
規模と形状 長径1.88m、推定される短径1.46mの楕円形で、深さは192cmである。壁は下半分でオーバーハング気味に内傾し、上半分で内彎しながら外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、8か所に小穴が穿たれている。長径方向はN-35°-Eである。

覆土 11層からなり、全体的にロームブロックを主体としている。第1～4層は炭化粒子を少量含み、第5～8層は暗褐色土の混入が比較的多く、第9～11層はロームブロックを主体として鹿沼パミスを中量含んでいる。覆土の堆積過程は、初期の段階で周囲に掘り上げられたロームブロック(第9～11層)などが崩落し、次に周囲の暗褐色土とロームブロックの混合土(第5～8層)が流入、最終的に炭化粒子を含む風化したロームブロックを主体とする褐色土(第1～4層)が埋積したと推定される。初期の段階は人為的に埋め戻されている可能性が、第1～8層は周囲からの土砂の流入を示す堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック多量
2 褐色	ロームブロック中量, 炭化物微量	8 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス中量
3 褐色	ロームブロック中量, 炭化物少量	9 褐色	ロームブロック多量, 鹿沼パミス中量
4 褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	10 褐色	鹿沼パミス多量, ロームブロック中量
5 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	11 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量
6 褐色	ロームブロック中量		

所見 周辺からは、早期から中期に比定される縄文土器が出土しているが、本跡からの出土はない。時期は形態から早期から中期の可能性が考えられるが明確でない。



第6図 第31号土坑実測図

第35号土坑（第7図）

位置 調査区西部のB2a4区で、標高25.8mの台地縁辺部に近い西向き緩斜面に位置している。

確認状況 重複や攪乱もなく、良好な遺存状況である。

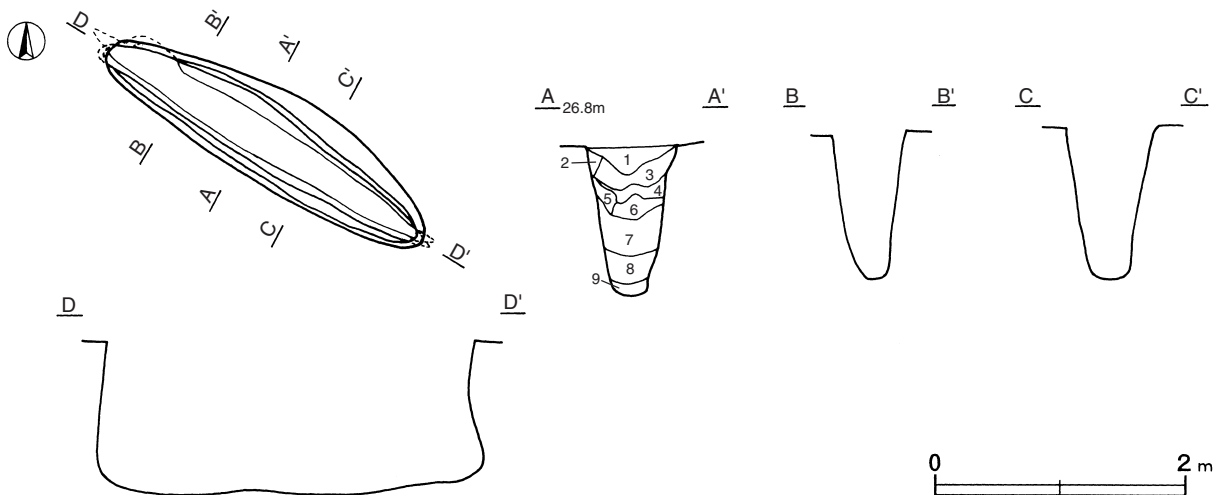
規模と形状 長径2.91m，短径0.75mの長楕円形で、深さは121cmである。壁は長径方向でオーバーハング気味に内傾し，短径方向でほぼ直立しながら外傾して立ち上がっている。底面は緩やかな凹凸があり，長径方向はN-59°-Wである。

覆土 9層からなる。土質や堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子微量	6 黒褐色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	7 にぶい黄褐色	ロームブロック中量
3 褐色	ロームブロック中量	8 にぶい黄褐色	ロームブロック中量，鹿沼ガミス微量
4 暗褐色	ロームブロック微量	9 黒褐色	ロームブロック少量，鹿沼ガミス微量
5 黒褐色	ロームブロック少量		

所見 周辺からは、早期から中期に比定される縄文土器が出土しているが、本跡からの出土はない。時期は形態から早期から中期の可能性が考えられるが明確でない。



第7図 第35号土坑実測図

(2) 炉跡

第1号炉跡 (第8図)

位置 調査区中央部のB2d2区で、標高26.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況 重複や攪乱もなく、良好な遺存状況である。

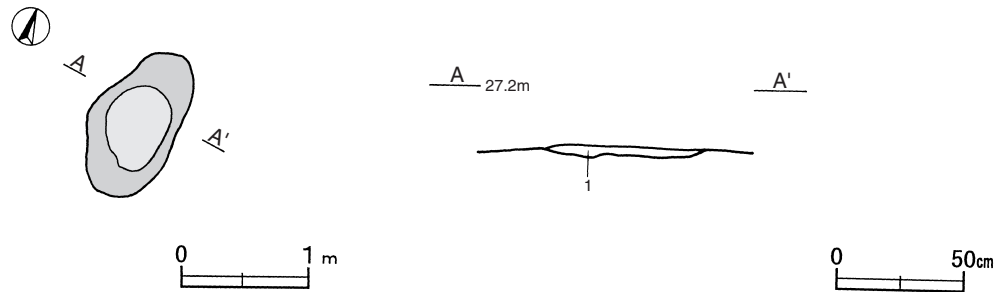
規模と形状 長径1.25m、短径0.71mの楕円形で、深さは5cmである。長径方向はN-33°-Eであり、炉床はやや凹凸のある皿状を呈し、火床部は火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 単一層である。

土層解説

1 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量

所見 周辺からは、早期から中期に比定される縄文土器が出土している。時期は早期から中期の可能性が考えられるが明確でない。周辺を精査した結果、柱穴などは確認されず、屋外炉や炉穴の可能性が高い。



第8図 第1号炉跡実測図

(3) 遺物包含層 (第10図)

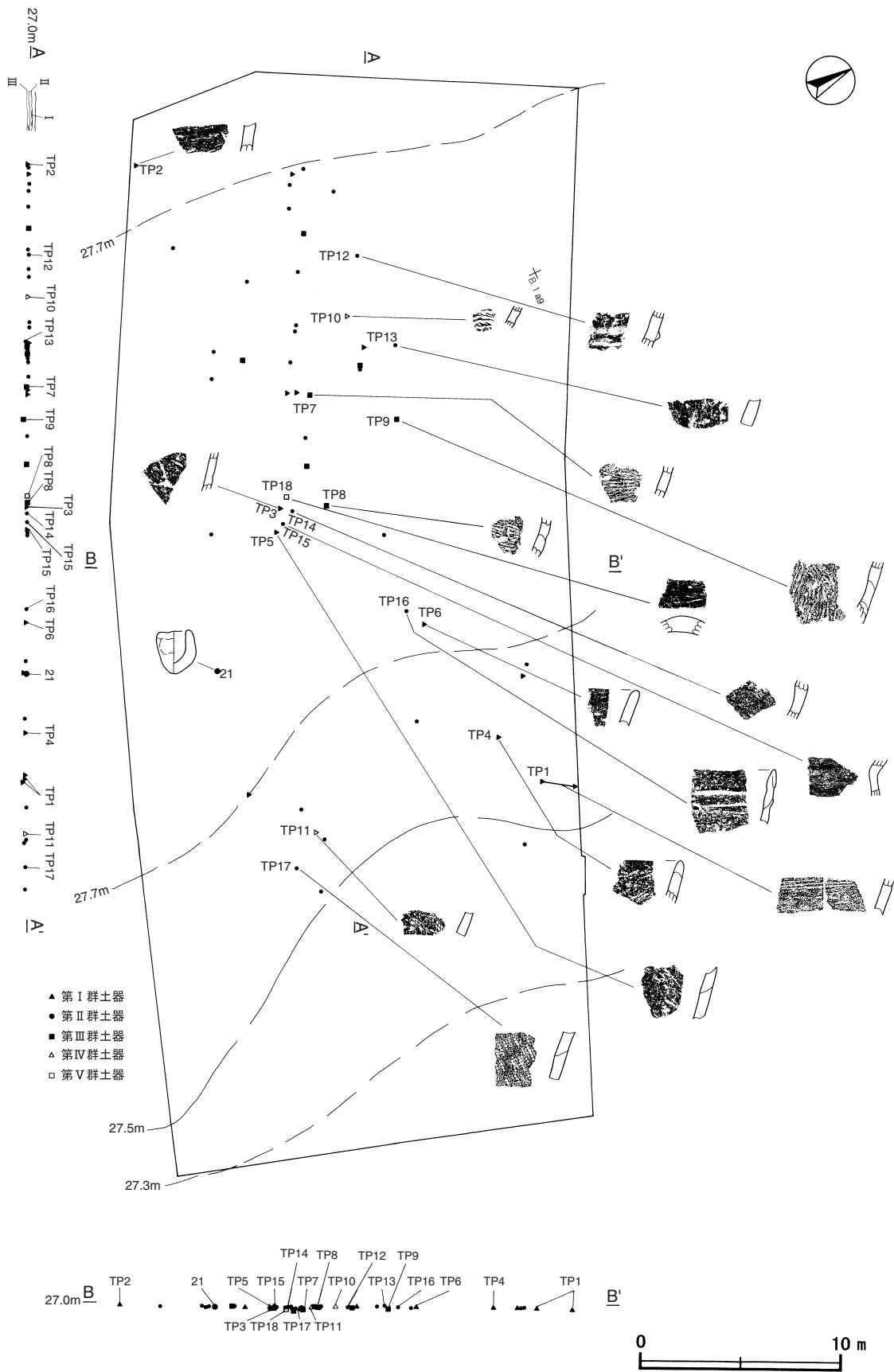
第1遺物包含層 (第9・10図)

位置 調査区中央部から西部の台地平坦部に位置している。

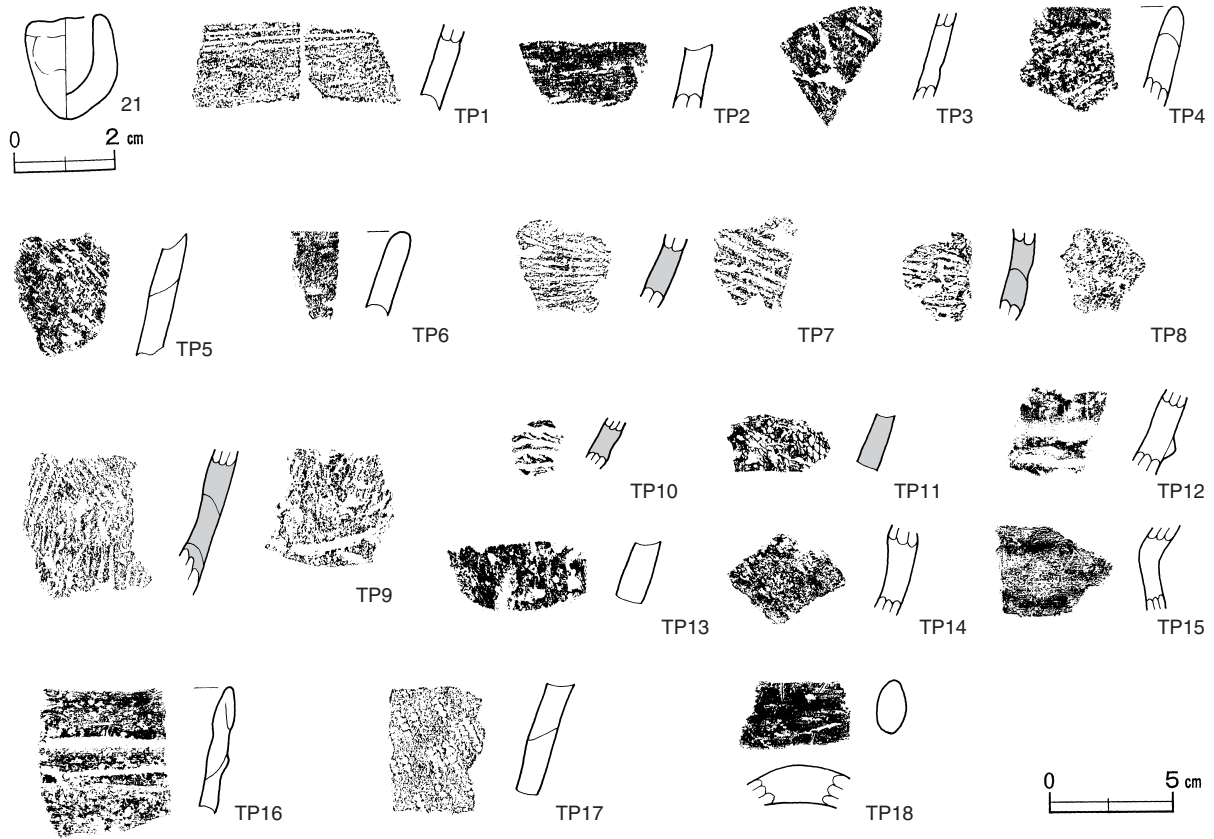
確認状況 遺構の確認作業中、確認面の第Ⅲ層上面から縄文土器片の出土が目立ったため、調査区全域で遺物の出土状況を記録し、出土層位の観察を行った。土器片が出土する層位は基本層序の第Ⅲ～Ⅳ層に相当し、特に第Ⅲ層中にほとんどの遺物が包含されているため、縄文時代の遺物包含層と判断した。

遺物出土状況 縄文土器片52点、礫4点、混入した土師器片6点が調査区中央部から西部の第Ⅲ層中から散漫に出土している。出土位置は標高26.7～26.9mで、平均標高は26.89mである。垂直分布幅は約20cmであり、接合関係は認められなかった。出土した縄文土器は、Ⅰ類：早期の擦痕文・沈線文系土器 (13点)、Ⅱ類：早期の条痕文系土器 (7点)、Ⅲ類：前期の竹管文系土器 (2点)、Ⅳ類：中期の阿玉台式土器 (28点)、Ⅴ類：時期不明の無文土器 (2点) の5類に大別できる。各類の平面分布は、それぞれの広がりや重複している。Ⅰ類及びⅣ類は比較的広範囲に分布するが、Ⅱ類は長径13.5m、短径8.5mの範囲にまとまって分布している。Ⅲ・Ⅴ類は点数が少ないため傾向は不明である。各類は垂直分布でも混在した状況を呈している。

所見 包含層が形成された時期は、早期と中期中葉の土器群が比較的多く出土していることから、中期中葉から中期中葉と考えられる。しかし、各時期における包含層の形成過程や出土量の相違など不明な点が多い。これらは、調査区内に居住活動の痕跡が確認されないため、一時的な狩猟場や短期間のキャンプサイトとして土地利用された結果と考えられる。



第9図 第1遺物包含層実測図



第10図 第1遺物包含層出土遺物実測図

第1遺物包含層出土遺物観察表 (第9・10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	時期・分類	備考
21	縄文土器	ミニチュア土器	1.2	2.2	—	長石	橙	普通	内・外面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	不明・Ⅴ類	70% PL 8
TP 1	縄文土器	深鉢	—	(3.4)	—	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	早期・Ⅰ類	PL 8
TP 2	縄文土器	深鉢	—	(2.6)	—	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	早期・Ⅰ類	
TP 3	縄文土器	深鉢	—	(3.6)	—	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	早期・Ⅰ類	
TP 4	縄文土器	深鉢	—	(4.7)	—	石英・長石・雲母	褐	普通	口辺部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	早期・Ⅰ類	
TP 5	縄文土器	深鉢	—	(5.6)	—	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	早期・Ⅰ類	
TP 6	縄文土器	深鉢	—	(3.4)	—	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口辺部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	早期・Ⅰ類	
TP 7	縄文土器	深鉢	—	(3.3)	—	石英・長石・雲母・繊維	にぶい橙	普通	体部内・外面に貝殻条痕文を施す	Ⅲ層～Ⅳ層	早期・Ⅱ類	
TP 8	縄文土器	深鉢	—	(3.6)	—	石英・長石・雲母・繊維	にぶい黄褐	普通	体部内・外面に貝殻条痕文を施す	Ⅲ層～Ⅳ層	早期・Ⅱ類	
TP 9	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	石英・長石・雲母・繊維	橙	普通	体部内・外面に貝殻条痕文を施す	Ⅲ層～Ⅳ層	早期・Ⅱ類	PL 8
TP10	縄文土器	深鉢	—	(2.2)	—	石英・長石・雲母・繊維	橙	普通	体部外面に半截竹管による平行沈線文を施す 内面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	前期・Ⅲ類	
TP11	縄文土器	深鉢	—	(2.5)	—	石英・長石・雲母・繊維	橙	普通	体部外面に単節縄文RLを施す 内面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	中期・Ⅳ類	
TP12	縄文土器	深鉢	—	(3.5)	—	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に断面三角形の隆帯を巡らす	Ⅲ層～Ⅳ層	中期・Ⅳ類	
TP13	縄文土器	深鉢	—	(2.6)	—	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	中期・Ⅳ類	
TP14	縄文土器	深鉢	—	(3.8)	—	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	中期・Ⅳ類	
TP15	縄文土器	深鉢	—	(3.3)	—	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	中期・Ⅳ類	
TP16	縄文土器	深鉢	—	(5.1)	—	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口辺部外面に輪積痕と棒状工具による2列の押引文を巡らす 内面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	中期・Ⅳ類	PL 8
TP17	縄文土器	深鉢	—	(4.9)	—	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に単節縄文LRを疎らに施す 内面ナデ	Ⅲ層～Ⅳ層	中期・Ⅳ類	
TP18	縄文土器	把手	—	(2.2)	—	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	ナデ調整	Ⅲ層～Ⅳ層	不明・Ⅴ類	

表2 土坑一覧表

番号	位置	長軸方向 長径方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土 遺物	備考 (時期・旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
23	B1b9	N-83°-W	(長楕円形)	(1.97)×(0.91)	(75)	人為	平坦	外傾	-	縄文時代早期～中期 本跡→SI6
31	B1a6	N-35°-E	[楕円形]	1.88×[1.46]	192	人為・自然	平坦	内斜・外傾	-	縄文時代早期～中期 本跡→SK24・26・27
35	B2a4	N-59°-W	長楕円形	2.91×0.75	121	自然	平坦	内斜・外傾	-	縄文時代早期～中期

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した古墳時代の遺構は、堅穴住居跡6軒と土坑一基である。これらの遺構は主に台地縁辺部から平坦部にかけて位置し、時期は前期と考えられる。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第1号住居跡(第11図)

位置 調査区東部のB2e7区で、標高26.6mの台地縁辺部に近い西向き緩斜面に位置している。

確認状況 東壁上部は斜面地形のため削平され、南壁の一部は攪乱されている。

規模と形状 長軸2.93m、短軸2.64mで長方形である。壁は高さ10～19cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-1°-Eである。

床 ほぼ平坦であり、炉の位置する南半分が全体的にくぼんでいる。全体的に軟弱で、炉の周囲が比較的踏み固められている。

ピット 1か所。位置や規模から出入り口施設に関連するピットの可能性が考えられる。床面からの深さは10cmと浅く、覆土は単一層である。

ピット土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 2 褐色 ロームブロック少量

貯蔵穴 床面からの深さは10cmと浅く、断面形は皿状を呈している。覆土の堆積状況は西側から土砂の流入を示し、自然堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

炉 地床炉で床面から5cmほど掘りくぼめられ、中央部南側に位置している。火床面は赤変硬化し、覆土は2層からなる。

炉土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

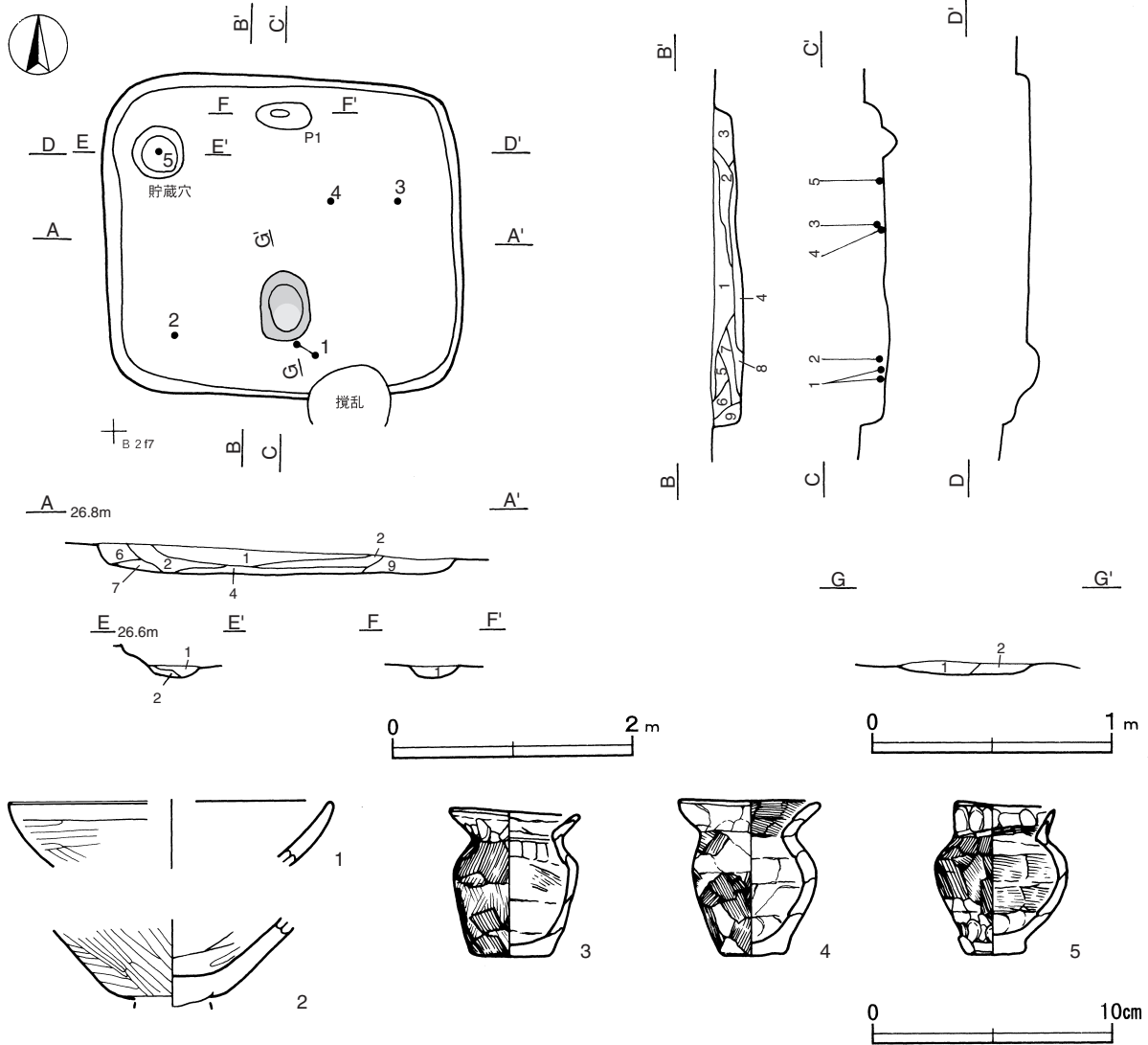
覆土 9層からなる。第3・6・9層はロームブロック主体の褐色土を基調として、壁際を中心に三角形の堆積を示している。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 6 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 7 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子ブロック少量、炭化物微量
 3 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 8 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 9 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片14点(高坏2, 小型壺3, 甕9)が床面や覆土上層を中心に散漫に出土している。覆土中の遺物はいずれも破片で、周囲から流入したような状態を呈している。1～5は床面付近から出土し、3点の小型壺は、一括して廃棄されたものと考えられる。また、混入した縄文土器片6点も出土している。

所見 3点の小型壺は、床面や床面よりやや上位から出土している点で、住居内で使用された後に遺棄されたものではなく、住居の廃絶に前後して廃棄されたと考えられる。整形方法や器形・大きさも類似することから、同じ製作者による祭祀儀礼的な器と考えられる。一辺3mに満たない小形の住居で、炉が中央部南側に位置する点も特異的である。出土遺物から、時期は前期前葉（3世紀中葉～3世紀末葉）と考えられる。



第11図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏	[14.3]	(2.7)	—	石英・長石 雲母	橙	普通	外面ヘラミガキ	床面	5% 内面摩滅
2	土師器	高坏	—	(3.6)	—	石英・長石 赤色粒子	にぶい橙	普通	外面ヘラミガキ, 内面ヘラナデ	床面	5%
3	土師器	小型壺	5.3	6.2	3.3	石英・長石	にぶい褐	普通	口辺部外面ナデ, 頸部外面指頭圧痕, 体部外面ハケ目, 内面・底部外面ナデ	下層	95% PL 8
4	土師器	小型壺	5.9	6.5	2.6	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口辺部外面指頭圧痕, 口辺部内面・体部外面ハケ目, 体部内面ヘラナデ, 底部外面ナデ	床面	90% PL 8
5	土師器	小型壺	4.1	6.4	2.3	石英・長石	にぶい褐	普通	口辺部指頭圧痕, 体部外面ハケ目後ヘラナデ・指頭ナデ, 体部内面ハケ目後ナデ, 底部外面ナデ	床面	100% PL 8

第2号住居跡（第12図）

位置 調査区中央部のB2c1区で、標高26.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況 西側約3.5mには、主軸方向がほぼ一致する第6号住居跡が位置している。遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸3.4m, 短軸3.02mで長方形である。壁は高さ26~32cmで, 外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-60°-Wである。

床 ほぼ平坦である。全体的に軟弱で, 炉の周囲が比較的踏み固められている。

貯蔵穴 床面からの深さは15cmと浅く, 断面形は皿状を呈している。覆土は4層からなり, ロームブロック主体の褐色土を基調としているため, 人為的に埋め戻されたと考えられる。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 3 褐色 | ロームブロック多量, 炭化物微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |

炉 地床炉で床面から6cmほど掘りくぼめられ, 中央部西側に位置している。火床面は赤変硬化し, 覆土は単一層である。

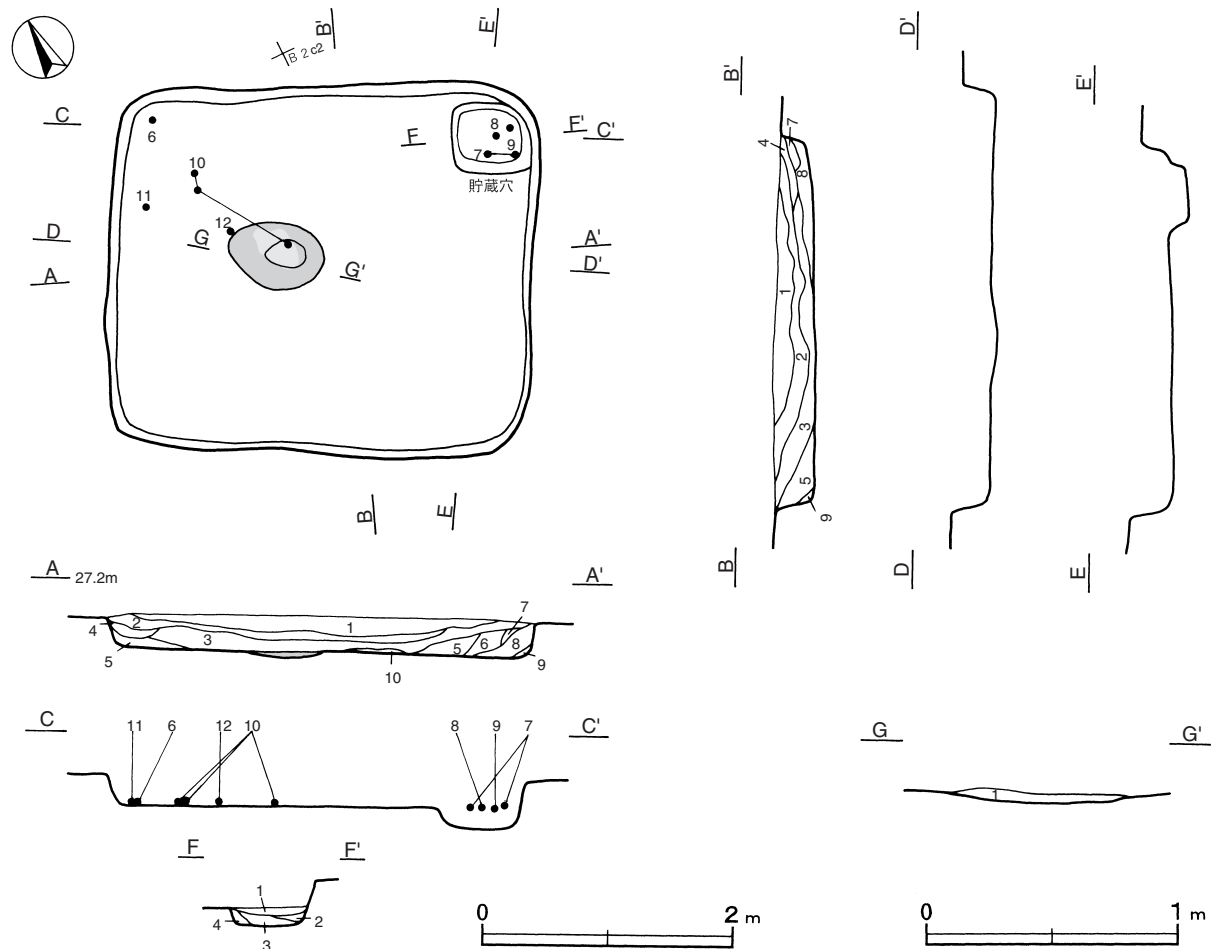
炉土層解説

- | | |
|--------|------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
|--------|------------------------|

覆土 10層からなる。第1~4層は黒褐色及び暗褐色土で, レンズ状堆積を示している。第5~9層はロームブロック主体の褐色土を基調として, 壁際を中心に三角形の堆積を示している。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示しており, 自然堆積と考えられる。

土層解説

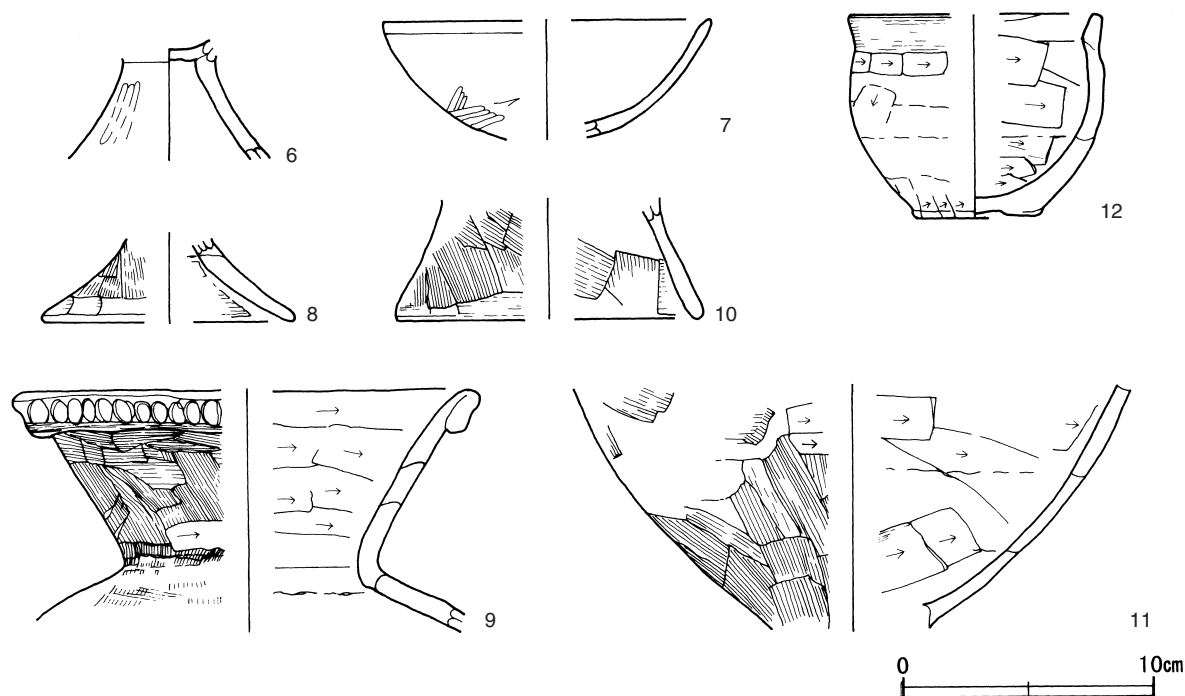
- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 8 褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量 |
| 5 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量 |



第12図 第2号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片129点（高坏15, 壺13, 甕101）, 焼成粘土塊30点, 礫2点が床面や覆土下層を中心に出土し, 炉の周囲やP1の覆土上面に比較的集中している。ほとんどが破片で接合関係も希薄であり, 周囲からの流入や廃棄されたような状態を呈している。また, 混入した縄文土器片28点, 平安時代の土師器片7点も出土している。

所見 出土した焼成粘土塊は本来何らかの土製品であったと推定されるが, いずれも細片かつ摩滅が著しく, 詳細は不明である。時期は床面から出土した遺物が前期中葉（4世紀初頭～4世紀前葉）に位置づけられるため, 同時期あるいはそれ以前と推定される。



第13図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
6	土師器	高坏	—	(4.7)	—	石英・長石	にぶい黄橙	普通	外面ヘラミガキ	床面	5% 内面摩滅
7	土師器	高坏	[13.0]	(4.8)	—	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	外面ヘラミガキ	貯蔵穴	5% 内面摩滅
8	土師器	器台	—	(3.5)	[10.0]	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	外面ハケ目後ヘラナデ, 内面ハケ目後ナデ	貯蔵穴	5%
9	土師器	壺	[17.6]	(9.6)	—	石英・長石・雲母	橙	普通	折り返し口辺外面指頭圧痕, 頸部外面ハケ目後ヘラナデ, 体部外面ハケ目後ヘラナデ, 内面ヘラナデ	貯蔵穴	15%
10	土師器	台付甕	—	(4.8)	[12.2]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	外面ハケ目後横ナデ, 内面ハケ目	床面	5%
11	土師器	甕	—	(9.6)	—	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	外面ハケ目, 内面ヘラナデ	床面	10%
12	土師器	小形甕	[10.0]	8.1	4.8	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口辺部横ナデ, 体部外面ヘラケズリ・ナデ, 内面ヘラケズリ, 底部外面ナデ	床面	40% PL8

第3号住居跡（第14図）

位置 調査区中央部のB2 e2区で, 標高26.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況 西側約12mには, 主軸方向がほぼ一致する第5号住居跡が位置している。遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸3.21m, 短軸3.12mで方形である。壁は高さ20～29cmで, 外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-10°-Wである。

床 ほぼ平坦である。全体的に軟弱で, 炉の周囲が比較的踏み固められている。

ピット 8か所。深さは11~20cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 床面からの深さは18cmと浅く、断面形は皿状を呈している。覆土は単一層で、ロームブロック主体の褐色土を基調としているため、人為的に埋め戻されたと考えられる。

貯蔵穴土層解説

1 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化物微量

炉 地床炉で床面から6cmほど掘りくぼめられ、中央部北西側に位置している。火床面は赤変硬化し、覆土は単一層である。

炉土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量

覆土 7層からなる。第1~5層は黒褐色及び暗褐色土で、レンズ状堆積を示している。第6・7層はロームブロック主体の褐色土を基調として、壁際を中心に三角形の堆積を示している。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

5 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック, 炭化物微量

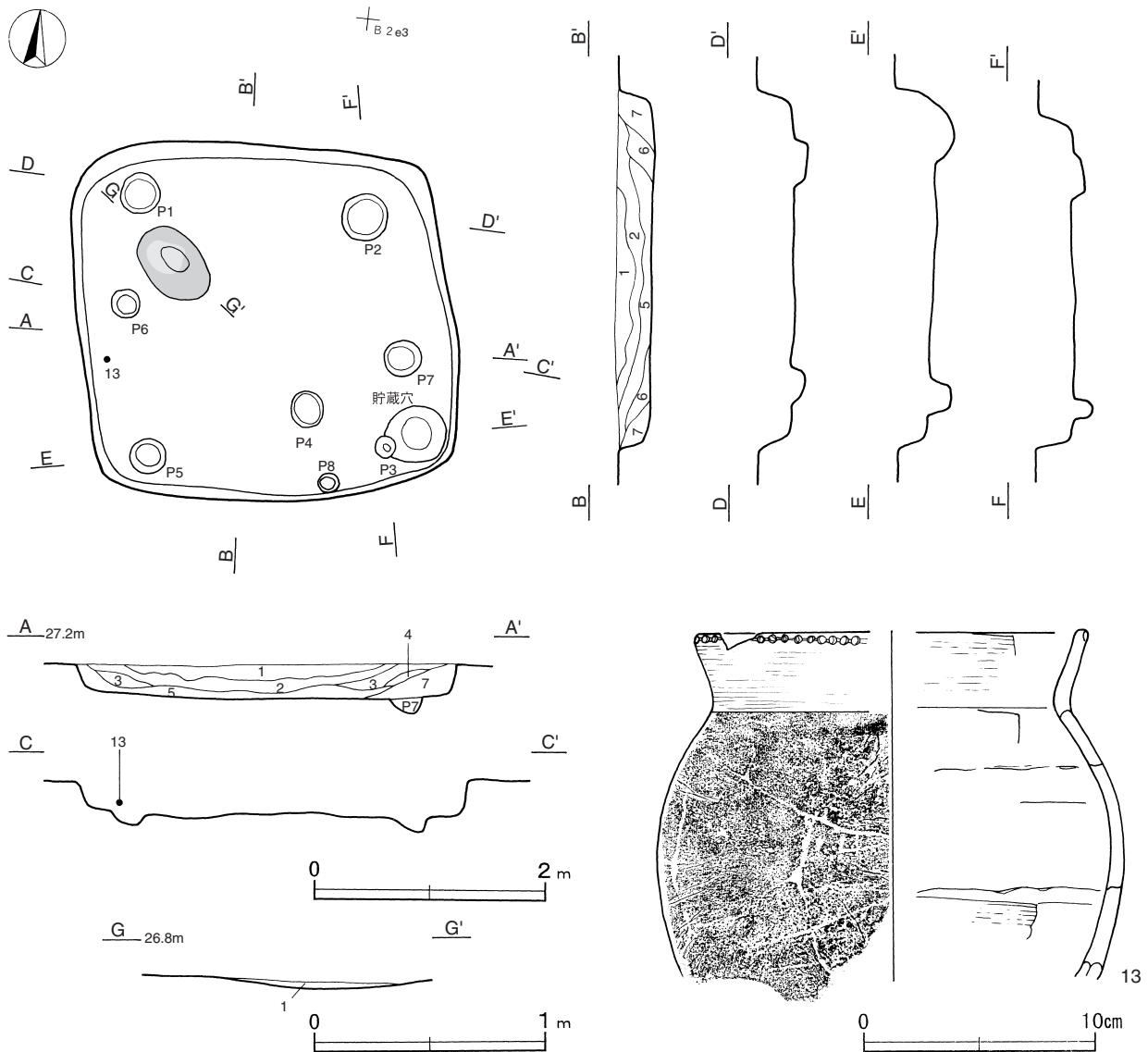
2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

6 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

7 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

4 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量



第14図 第3号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片59点（高坏1, 壺1, 甕57）、礫10点が覆土下層を中心に出土し、炉の周囲に比較的集中している。ほとんどが破片で接合関係も希薄であり、周囲からの流入や廃棄されたような状態を呈している。また、混入した縄文土器片22点も出土している。

所見 時期は出土遺物が少ないため明確でない。覆土下層に廃棄された13は、前期中葉（4世紀初頭～4世紀前葉）に位置づけられることから、同時期あるいはそれ以前と推定される。

第3号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
13	土師器	甕	[16.7]	(15.0)	—	石英・長石・雲母	淡黄	普通	口唇部刻み、口辺部横ナデ、体部ヘラナデ	下層	10%

第4号住居跡（第15図）

位置 調査区中央部のB2f1区で、標高26.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況 重複や攪乱もなく、遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸3.90m、短軸3.52mで長方形である。壁は高さ28～32cmで、北西及び南西壁はほぼ直立し、他で外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-55°-Eである。

床 ほぼ平坦である。全体的に軟弱で、炉の周囲が比較的踏み固められている。

ピット 4か所。深さは8～27cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 床面からの深さは31cmで、断面形はU字状を呈している。覆土は単一層で、ロームブロック主体の褐色土を基調としているため、人為的に埋め戻されたと考えられる。

貯蔵穴土層解説

1 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物微量

炉 地床炉で床面から8cmほど掘りくぼめられ、中央部北側に位置している。火床面は赤変硬化し、覆土は3層からなる。

炉土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量

2 暗褐色 焼土ブロック・ロームブロック少量

3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量

覆土 10層からなる。第1～8層は黒褐色及び暗褐色土で、レンズ状堆積を示している。第9・10層はロームブロック主体の褐色土を基調として、壁際を中心に三角形の堆積を示している。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

3 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

4 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量

5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

6 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

7 暗褐色 ロームブロック中量

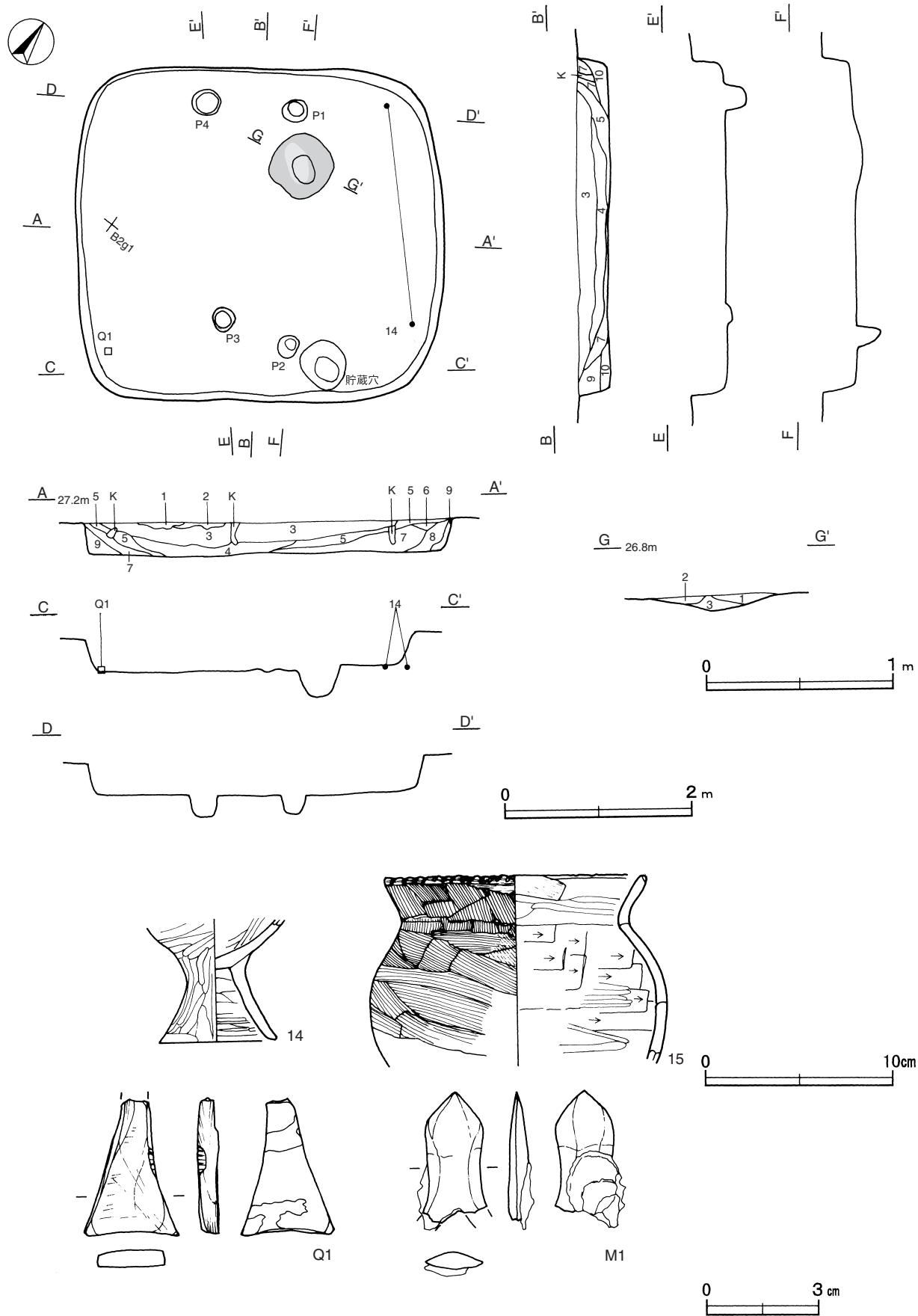
8 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量

9 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

10 褐色 ロームブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片70点（器台2, 高坏10, 壺3, 甕55）、砥石1点、鉄鏃1点、焼成粘土塊5点、礫6点が覆土中層を中心に散漫に出土している。ほとんどが破片で接合関係も希薄であり、周囲からの流入や廃棄されたような状態を呈している。Q1は床面から、M1は覆土中から出土している。また、混入した縄文土器片30点、剥片2点も出土している。

所見 出土した焼成粘土塊は、いずれも細片かつ摩滅が著しく、詳細は不明である。床面に廃棄された14・15は、前期中葉（4世紀初頭～4世紀前葉）に位置づけられることから、同時期あるいはそれ以前と推定される。M1は覆土中からの出土で、正確な出土位置を検討することができないが、県内において無茎鏃は後期以降に盛行する型式であり、後世の鉄鏃が覆土中に混入したと考えることもできる。



第15图 第4号住居跡・出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土師器	高坏	—	(6.5)	[6.2]	石英・長石	橙	普通	坏部・脚部外面ヘラミガキ, 脚部内面指頭ナデ・ヘラミガキ	床面	40% PL 8
15	土師器	甕	13.6	(10.0)	—	石英・長石・雲母	橙	普通	口唇部刻み, 外面ハケ目, 口辺部内面ハケ目後ヘラナデ, 体部内面ヘラケズリ後ヘラナデ	床面	35% PL 8

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	(3.6)	(2.5)	(0.6)	(4.9)	凝灰岩	3面使用, 研磨痕・擦痕, 欠損後再生	下層	PL 8

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	鉄鏃	(3.8)	(1.9)	0.7	(3.1)	鉄	無茎鏃, 逆棘先端部欠損	覆土中	PL 8

第5号住居跡（第16図）

位置 調査区中央部のB1e8区で、標高26.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況 遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸3.92m, 短軸3.91mで方形である。壁は高さ25~27cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-3°-Wである。

床 ほぼ平坦で、北東コーナー部がわずかにくぼんでいる。全体的に軟弱で、炉の周囲が比較的踏み固められている。

ピット 3か所。深さは12~18cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。床面からの深さは24cmと比較的浅く、断面形はU字状を呈している。覆土は、ロームブロック主体の褐色土を基調としているため、人為的に埋め戻されたと考えられる。

貯蔵穴1土層解説

1 褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量 2 褐色 ロームブロック中量

貯蔵穴2土層解説

1 褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量 3 褐色 ロームブロック多量, 炭化物微量
2 褐色 ロームブロック多量, 炭化物・焼土粒子微量 4 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

炉 地床炉で床面から6cmほど掘りくぼめられ、中央部北側に位置している。火床面は赤変硬化し、覆土は2層からなる。

炉土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 2 暗赤褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量

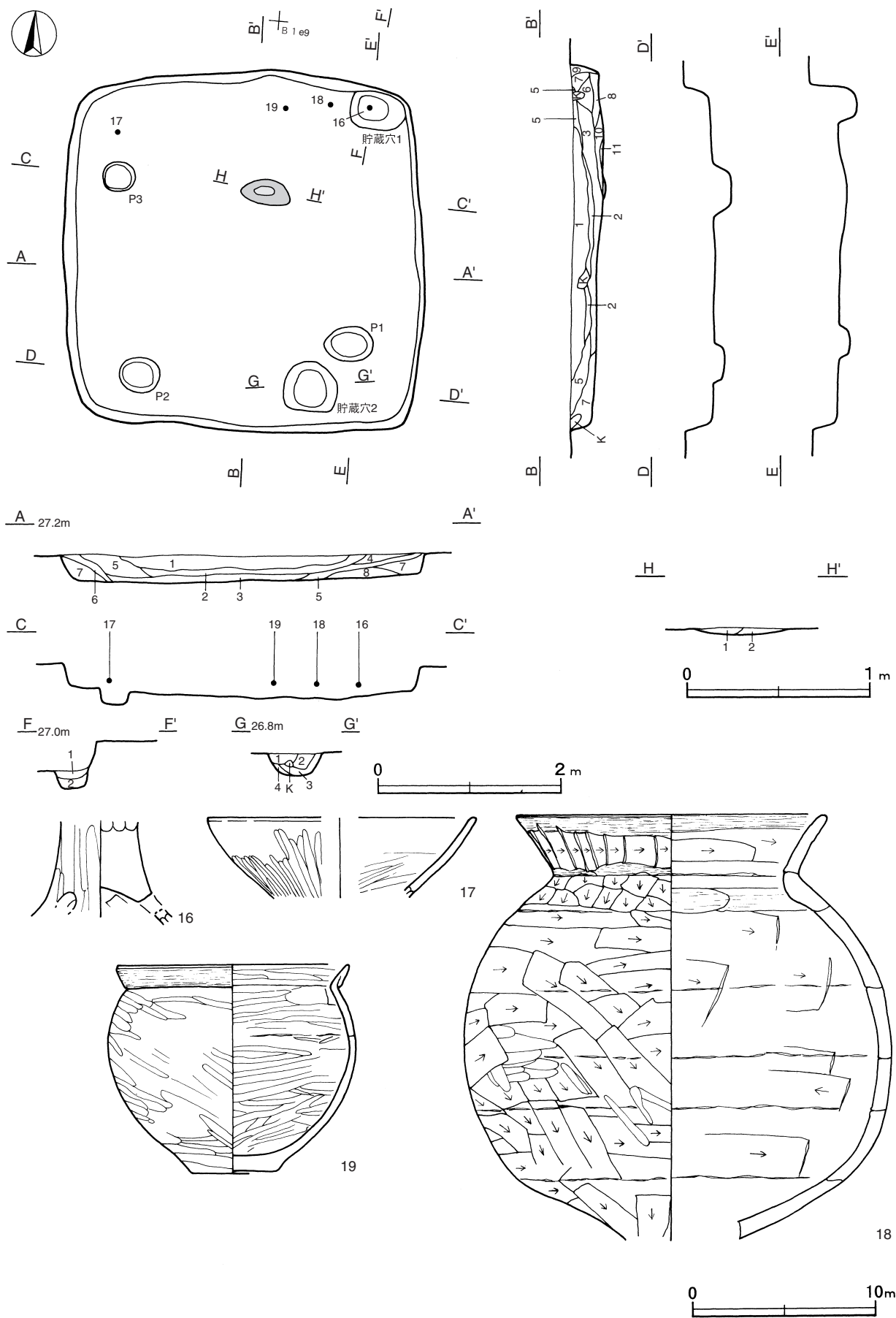
覆土 11層からなる。第1~5層は黒褐色及び暗褐色土で、レンズ状堆積を示している。第6~9層はロームブロック主体の褐色土を基調として、壁際を中心に三角形の堆積を示している。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 7 褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 8 褐色 ロームブロック中量
3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 9 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量 10 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量
5 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 11 暗褐色 ロームブロック中量
6 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片166点（器台1, 高坏2, 壺4, 甕159）, 礫5点が床面や覆土下層を中心に散漫に出土している。18は貯蔵穴1の西側の床面から潰れた状況で出土している。その他はほとんどが破片で接合関係も希薄であり、周囲からの流入や廃棄されたような状態を呈している。また、混入した縄文土器片52点, 磨製石斧片1点も出土している。

所見 床面で潰れた状況で出土した18は、前期後葉（4世紀中葉~4世紀末葉）に位置づけられることから、同時期あるいはそれ以前と推定される。



第16図 第5号住居跡・出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
16	土師器	高坏	—	(5.5)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	内・外面ヘラナデ, 3窓か	下層	10%
17	土師器	小形壺	[14.6]	(4.2)	—	石英・長石	にぶい黄橙	普通	内・外面ヘラミガキ	下層	5%
18	土師器	甕	16.6	(23.1)	—	石英・長石・雲母	浅黄橙	普通	口辺部外面横ナデ・ヘラケズリ, 体部外面ヘラケズリ, 内面横ナデ・ヘラケズリ	下層	85% PL 8
19	土師器	小形甕	12.6	11.2	4.8	石英・長石	橙	普通	口辺部外面横ナデ, 体部外面ヘラミガキ, 内面ヘラミガキ, 底部外面ヘラケズリ	下層	40% PL 8

6号住居跡（第17図）

位置 調査区中央部のB1b0区で、標高26.9mの台地平坦部に位置している。

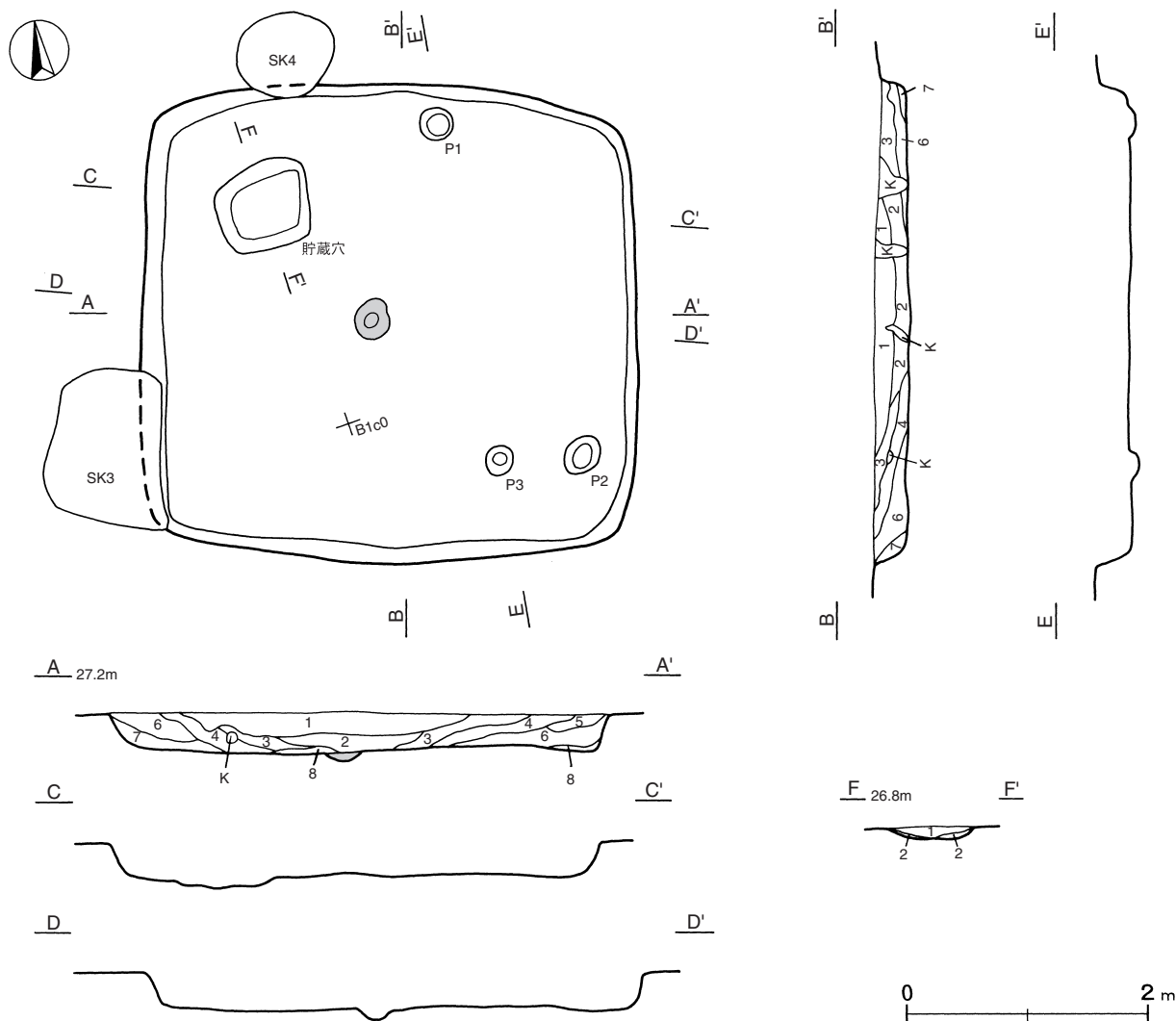
重複関係 第23号土坑を掘り込み、第3号土坑に西壁の一部と、第4号土坑に北壁の一部をそれぞれ掘り込まれている。東側約3mには、主軸方向がほぼ一致する第2号住居跡が位置している。

規模と形状 長軸4.03m、短軸3.97mで方形である。壁は高さ28~30cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-72°-Wである。

床 ほぼ平坦である。全体的に軟弱で、炉の周囲が比較的踏み固められている。

ピット 3か所。深さは6~10cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 床面からの深さは10cmと浅く、断面形は皿状を呈している。覆土は2層からなり、ロームブロック主体の褐色土を基調としているため、人為的に埋め戻されたと考えられる。



第17図 第6号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量 2 褐色 ロームブロック少量

炉 地床炉で床面から10cmほど掘りくぼめられ, 中央部に位置している。火床面は認められず, わずかに赤変しており, 覆土は単一層である。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量

覆土 8層からなる。第1～4層は黒褐色及び暗褐色土で, レンズ状堆積を示している。第5～7層はロームブロック主体の褐色土を基調として, 壁際を中心に三角形の堆積を示している。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示しており, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 7 褐色 | ロームブロック多量, 炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微 | 8 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片10点(甕), 礫2点が床面や覆土下層から出土している。ほとんどが破片で図示できない。接合関係も希薄であり, 周囲からの流入や廃棄されたような状態を呈している。また, 混入した縄文土器片18点も出土している。

所見 時期は出土遺物が少ないため明確でない。東側約3mに位置する第2号住居跡とは主軸方向がほぼ一致するため, 前期中葉(4世紀初頭～4世紀前葉)の可能性が考えられる。

(2) 土坑

第28号土坑 (第18図)

位置 調査区中央部のB2b1区で, 標高26.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況 重複や攪乱もなく, 遺存状況は良好である。

規模と形状 長径0.72m, 短径0.51mの楕円形で, 浅い皿状の掘り込み部と深い柱穴状の掘り込み部の2段構造を呈している。深さは前者が6cm, 後者が34cmである。底面は皿状で, 壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN-59°-Wである。

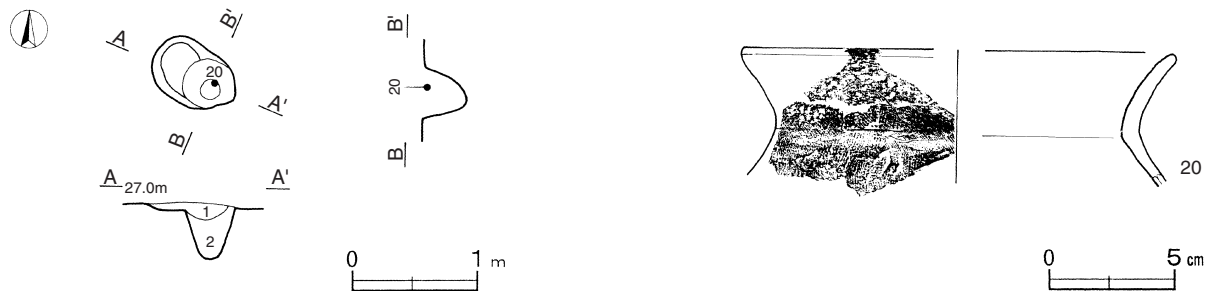
覆土 2層からなる。第2層はロームブロックを主体としており, 埋め戻された可能性が高い。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量 2 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片44点(甕)が第1層から出土している。すべて同一個体であるが1個体に復元できなかったため, 破損した後に廃棄されたと考えられる。

所見 性格は不明である。時期は廃棄された遺物が前期後葉(4世紀中葉～4世紀末葉)と考えられることから, 同時期あるいはそれ以前と推定される。



第18図 第28号土坑・出土遺物実測図

第28号土坑出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
20	土師器	甕	[17.0]	(5.3)	—	石英・長石	明赤褐	普通	口辺部外面横ナデ，体部外面ハケ目，内面ヘラナデ	上層	5%

表3 住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向 長軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)
								支柱穴	出入口	ピット	貯蔵穴	炉			
1	B2e7	N-1°-E	長方形	2.93×2.64	10~19	平坦	-	-	1	-	1	1	自然	土師器(高坏・壺・小型壺)	前期前葉(3世紀中葉~3世紀末葉)
2	B2c1	N-60°-W	長方形	3.40×3.02	26~32	平坦	-	-	-	-	1	1	自然	土師器(高坏・壺・甕)，焼成粘土塊，礫	前期中葉(4世紀初頭~4世紀前葉)
3	B2e2	N-10°-W	方形	3.21×3.12	20~29	平坦	-	-	-	8	1	1	自然	土師器(高坏・壺・甕)，礫	前期中葉(4世紀初頭~4世紀前葉)
4	B2f1	N-55°-W	長方形	3.90×3.52	28~32	平坦	-	-	-	4	1	1	自然	土師器(器台・高坏・壺・甕)，砥石，鉄鏝，焼成粘土塊，礫	前期中葉(4世紀初頭~4世紀前葉)
5	B1e8	N-3°-W	方形	3.92×3.91	25~27	平坦	-	-	-	3	2	1	自然	土師器(器台・高坏・壺・甕)，礫	前期後葉(4世紀中葉~4世紀末葉)
6	B1b0	N-72°-W	方形	4.03×3.97	6~18	平坦	-	-	-	3	1	1	自然	土師器(甕)，礫	前期中葉(4世紀初頭~4世紀前葉) SK23→本跡→SK3・4

3 中世以降の遺構と遺物

今回の調査で確認した中世以降の遺構は、方形竪穴建物跡1棟、道路跡1条、土坑30基、溝3条である。これらの遺構は、方形竪穴建物跡が調査区西部の緩斜面に、土坑や溝が調査区全域に分布している。

ここでは遺構の形態や覆土、重複関係などから、中世以降に位置づけられる遺構について、その特徴と出土した遺物について記述する。また、土坑及び溝については、実測図と土層解説を掲載し、詳細は一覧表に記載する。

(1) 方形竪穴建物跡

第1号方形竪穴建物跡（第19図）

位置 調査区西部のB2a3区で、標高26.4mの台地平坦部に位置している。

確認状況 重複や攪乱もなく、遺存状況は良好である。

規模と形状 長軸2.90m、短軸2.68mの方形である。壁は高さ6~18cmで、外傾して立ち上がっている。北壁はやや弧状を呈している。長軸方向はN-80°-Wである。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁直下には断続的に溝がめぐり、小穴が穿たれている。

ピット 3か所。P1、P2は柱穴や出入り口施設に関係するピットと考えられる。P1は中央部に位置し、深さは46cmである。P2は西壁の中央部に位置し、内傾気味に掘り込まれている。深さは22cmである。P3は深さは10cmで、性格は不明である

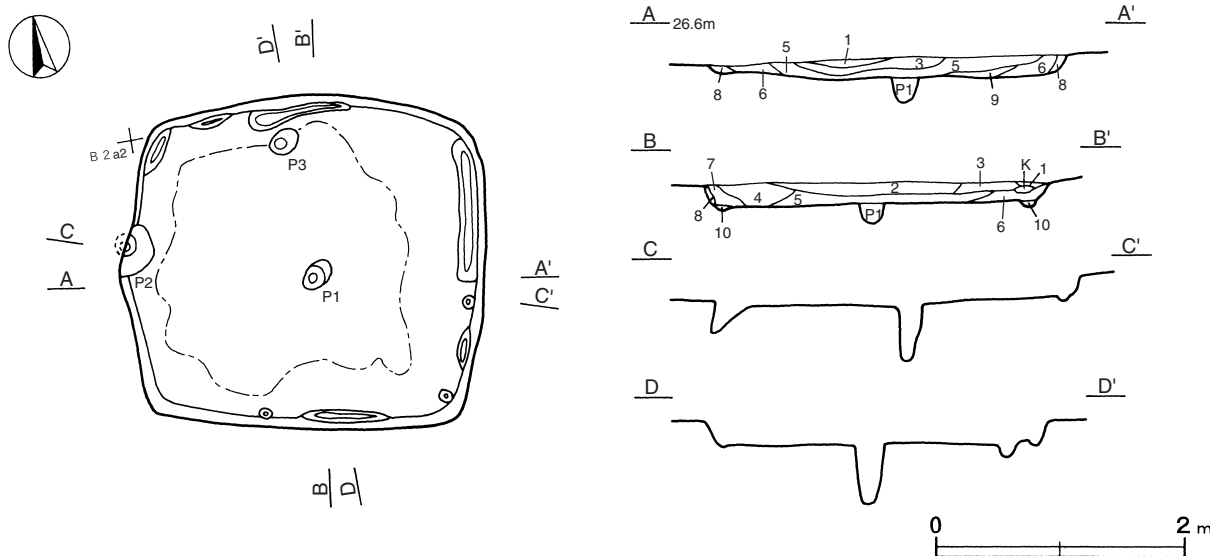
覆土 10層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	6 暗褐色	ロームブロック中量，炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ローム粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック少量，炭化物微量
5 黒褐色	ロームブロック少量，炭化物微量	10 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 混入したと考えられる縄文土器片18点，土師器片2点，礫2点が出土している。

所見 出土遺物がないため明確でないが、時期は覆土や形態から中世以降と考えられる。床面に見られる硬化面の存在から、居住施設の一部や穴蔵と推定される。



第19図 第1号方形竪穴建物跡実測図

(2) 道路跡

第1号道路跡 (第20図)

位置 調査区中央部から西部のA 1 j9～B 1 b5区で、標高26.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第5・22・27・29・30・32・33号土坑、第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認した長さは18.5mで、上幅1.31～1.90m、下幅0.44～1.32mで、深さ12～22cmである。走行する方向はN-67°-Eで、ほぼ直線的に延びている。壁は緩やかに外傾し立ち上がり、底面及び覆土下層には幅0.5～1.4mの硬化面が形成されており、上面は細かい凹凸が見られる。

覆土 12層からなる。第1～4・12層は硬化面上位に堆積した締りのない土層であり、自然堆積と考えられる。

第5・6層は硬化面を形成する土層で、第7～11層は硬化面下位の掘り方の土層である。

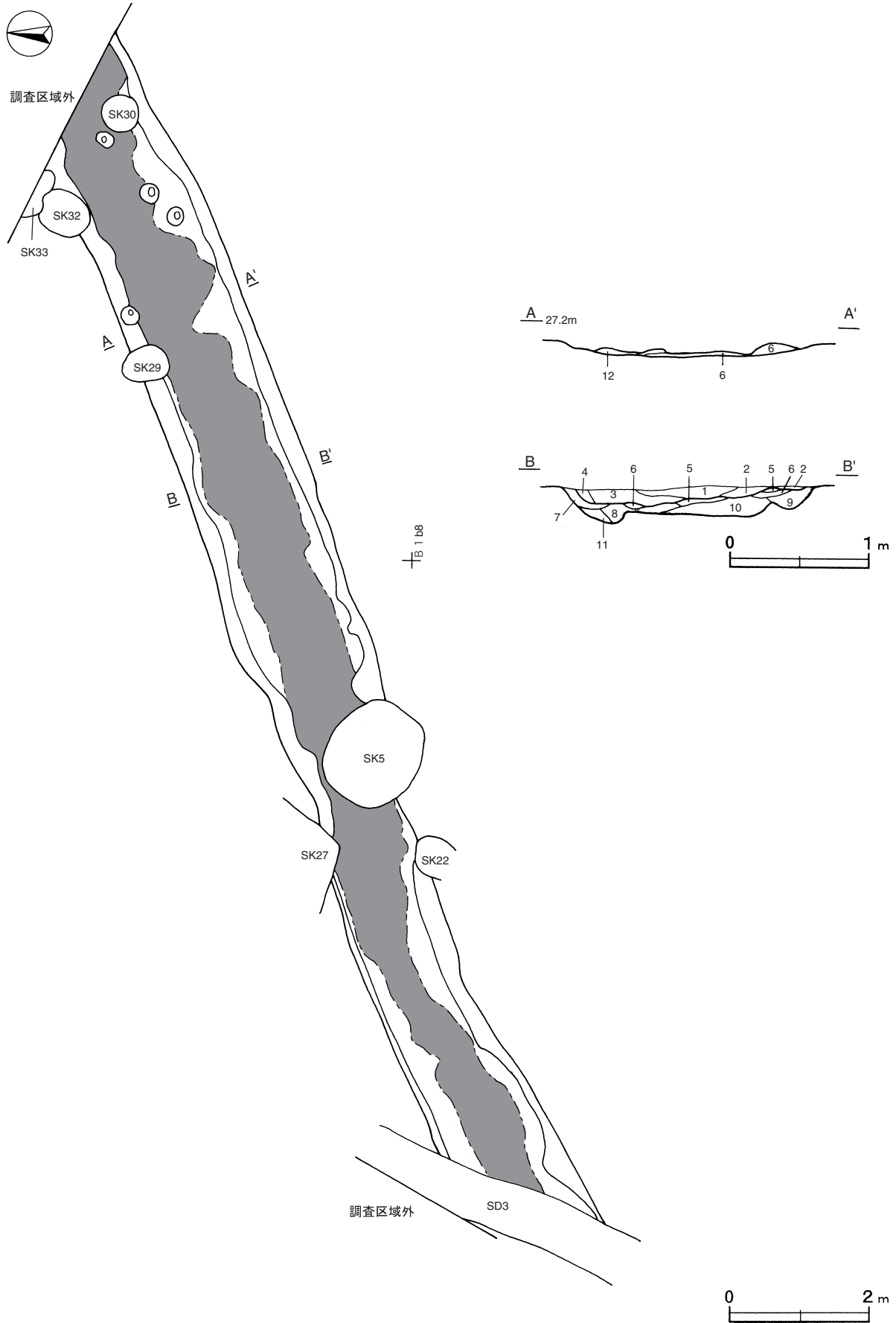
土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	8 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化物微量
3 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化物微量
4 暗褐色	ロームブロック中量	10 褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	11 褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック少量, 炭化物微量	12 黒褐色	ロームブロック少量

所見 形成された硬化面は1面のみで、部分的に硬化面の下位に掘り方を有している。地山を溝状に浅く掘り込み、掘り方の凹凸が著しい部分や使用に伴って沈降した部分などを修復したと考えられる。しかし、硬化面が1面であることや、遺物の流入が見られないことなどから、使用された期間は比較的短いと推定される。時期は、覆土の様相などから中世を遡ることはないと考えられる。

(3) 土坑

規模と形状から6つに分類することができる。A類は長径1m以上の楕円形を呈する土坑、B類は長径50cm以上1m未満の楕円形を呈する土坑、C類は長軸1m以上の長方形を呈する土坑、D類は円形ないし楕円形を呈し、底面に溝状の掘り込みを伴う土坑、E類は長軸1m以上の隅丸方形を呈する土坑、F類は長径50cm未満の円形ないし楕円形を呈する土坑で、柱穴状に深く掘り込んだものを含む。分布状況に傾向や著しい偏りは認められず、西側斜面を除いた調査区全域に分布している。中でも特徴的なC類は長軸方向がほぼ一致し、一



第20図 第1号道路跡実測図

定の距離をもって分布している。また、底面に溝状の掘り込みを伴うD類は、円筒状の80cm以上の掘り込みがあり、隣接して構築されている。規模と形状から、墓坑や貯蔵穴の可能性が高いと考えられるが、それを裏付けるような遺物は出土していない。その他の土坑は性格不明である。これらの土坑の時期は、覆土の様相などから近世を遡ることはないと考えられる。

第1号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 にぶい褐色 ロームブロック少量

第2号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 4 灰黄褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 8 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 9 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量

第3号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 褐色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量

第4号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第5号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子・鹿沼パミス微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子・鹿沼パミス微量

第6号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化物中量, 焼土粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック少量

第7号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第9号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第10号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物・鹿沼パミス微量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子・鹿沼パミス微量

第12号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第13号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第14号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第15号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量

第16号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第17号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第18号土坑土層解説

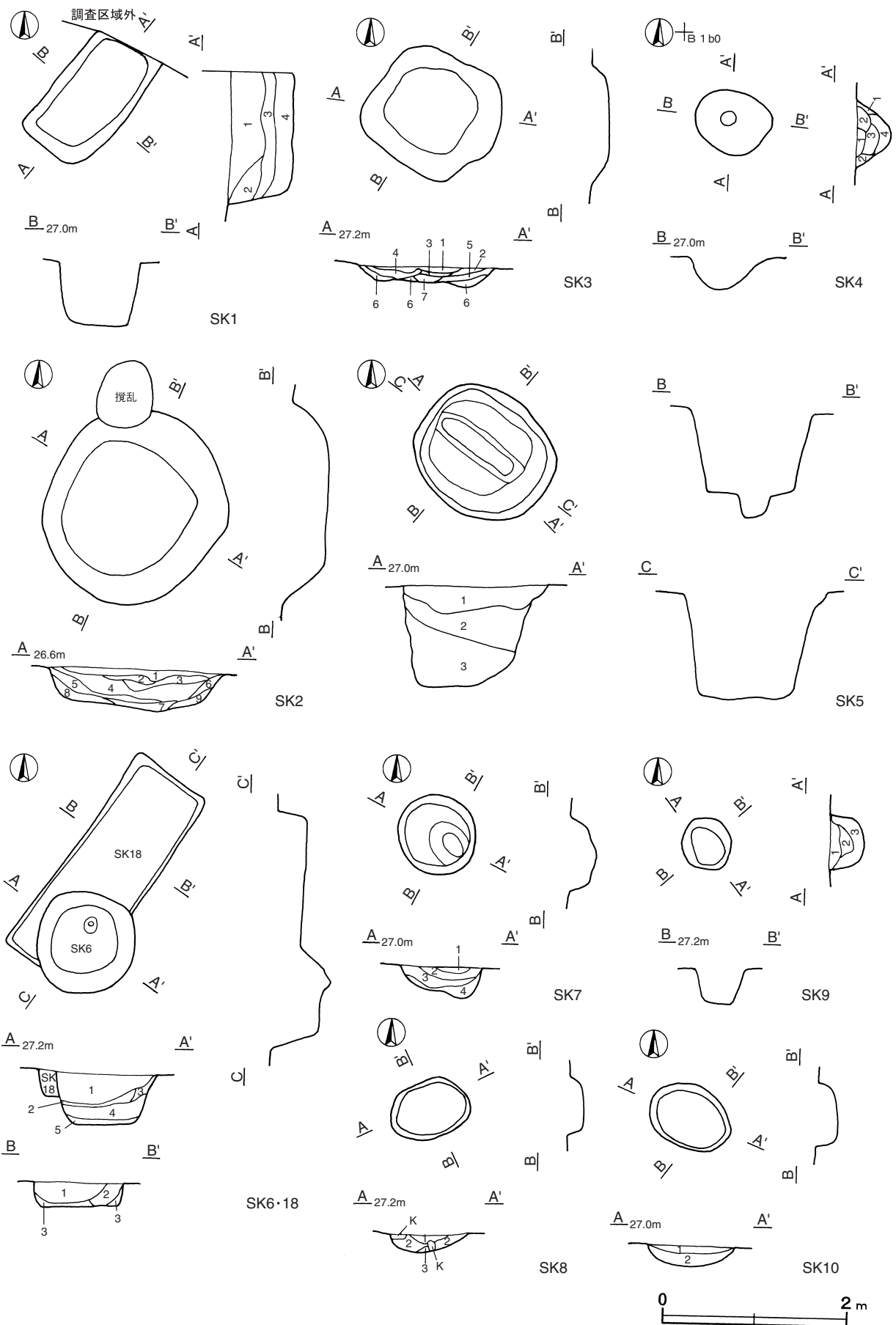
- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第19号土坑土層解説

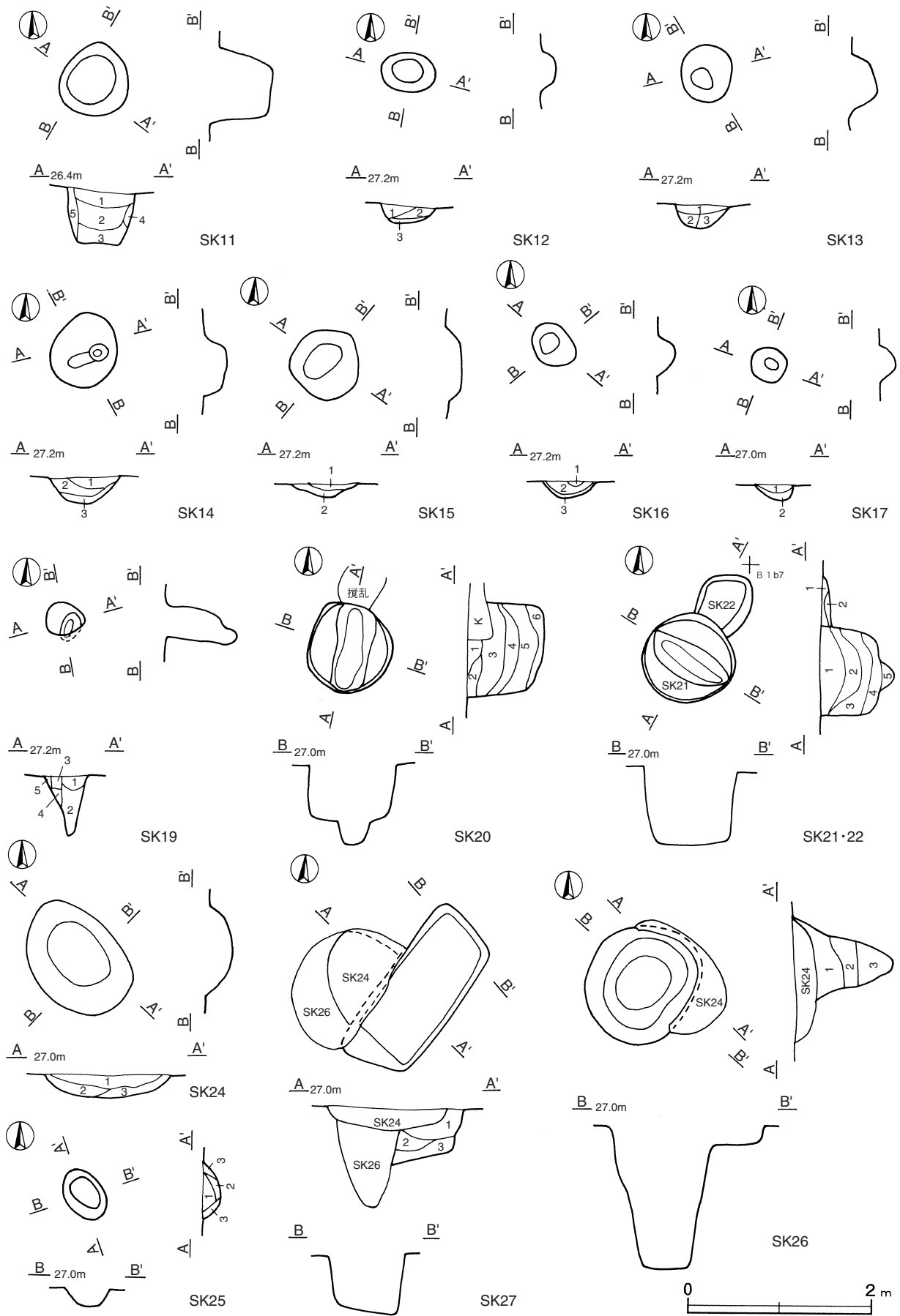
- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

第20号土坑土層解説

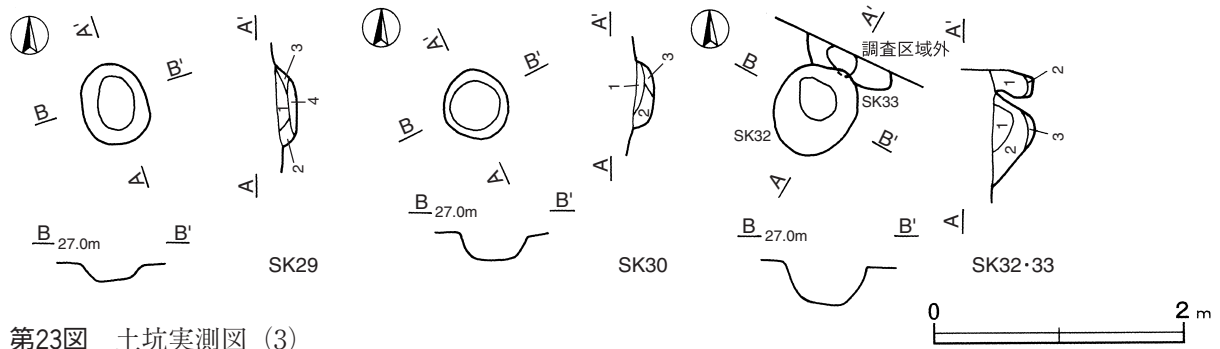
- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化材微量
- 6 暗褐色 ロームブロック多量



第21図 土坑実測図 (1)



第22图 土坑实测图 (2)



第23図 土坑実測図 (3)

第21号土坑土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 |
| 4 | 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |

第22号土坑土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 | 黒褐色 | ロームブロック中量 |

第24号土坑土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化物・鹿沼パミス微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |

第25号土坑土層解説

- | | | |
|---|-----|---------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 | 褐色 | ロームブロック中量 |

第26号土坑土層解説

- | | | |
|---|-----|------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック中量 |

第27号土坑土層解説

- | | | |
|---|-----|--------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス微量 |

第29号土坑土層解説

- | | | |
|---|-----|---------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 2 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 | 褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |

第30号土坑土層解説

- | | | |
|---|-----|---------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |

第32号土坑土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 | 褐色 | ロームブロック少量 |

第33号土坑土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |

(4) 溝

確認した溝は排水溝や区画溝などと考えられる。時期は、覆土の様相などから近世を遡ることはないと考えられる。第1号溝は南部で二段構造を呈し、地形の等高線にほぼ平行して構築され、北側は斜面部へと延びていくと推定される。第2号溝は第1号溝の西側をほぼ平行して走行しており、両者には何らかの関係が想定される。第3号溝は現況の農道に沿って確認され、土地の境界に見られる区画溝や根切り溝的な性格が考えられる。覆土の様相は表土と類似しており、時期は近代以降と推定される。

第1号溝土層解説

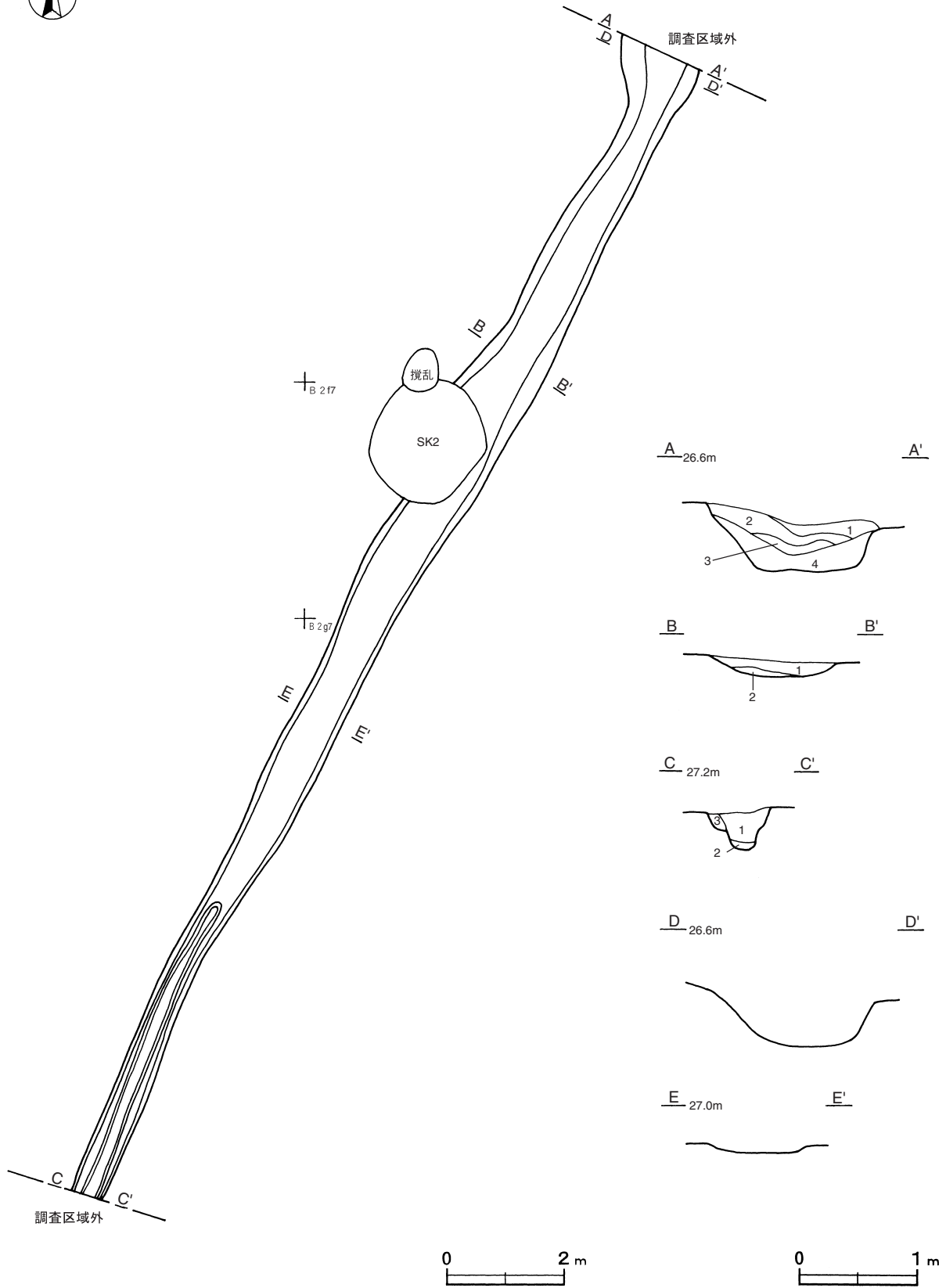
- | | | |
|---|-----|------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 | 褐色 | ロームブロック多量, 鹿沼パミス少量 |

第2号溝土層解説

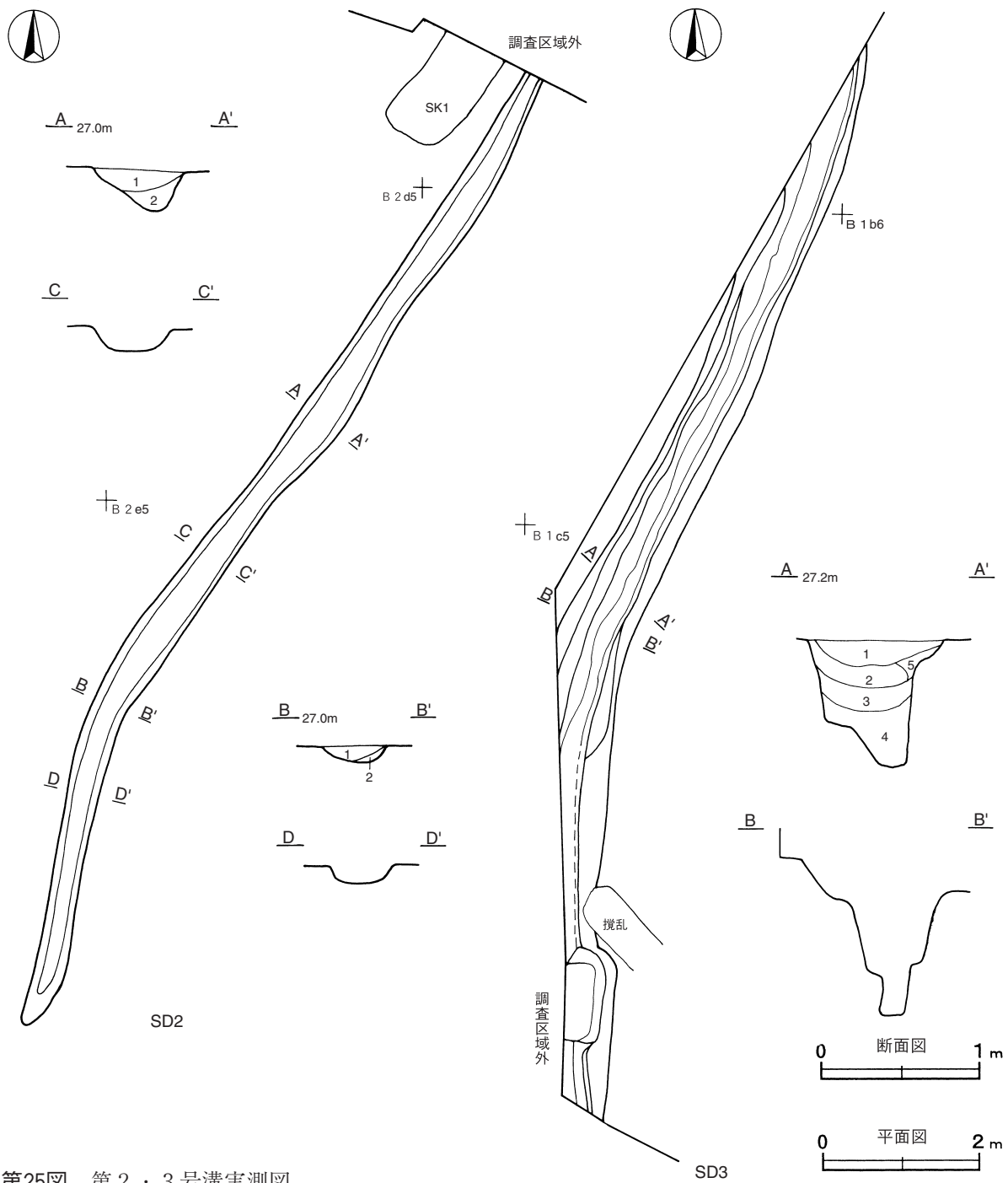
- | | | |
|---|-----|------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック多量, 炭化物微量 |

第3号溝土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 5 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |



第24図 第1号溝実測図



第25図 第2・3号溝実測図

表4 土坑一覽表

番号	位置	長軸方向 長径方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)	分類
				長径×短径 (m)	深さ (cm)						
1	B 2 c6	N-37°-E	長方形	(1.43)×0.86	71	人為	平坦	垂直	-	近世	C
2	B 2 f7	N-25°-E	楕円形	2.12×1.86	44	自然	平坦	外傾	-	近世 SD 1→本跡	A
3	B 1 b9	N-60°-W	隅丸長方形	1.40×1.25	21	自然	平坦	緩斜	-	近世 SI 6→本跡	E
4	B 1 b0	N-86°-W	楕円形	0.88×0.70	30	人為	皿状	外傾	-	近世	B
5	B 1 a7	N-53°-W	隅丸長方形	1.51×1.34	117	人為	有段	垂直	-	近世 SF 1→本跡	D
6	B 2 d1	-	円形	1.13×1.10	52	人為	平坦	外傾	-	近世 SK18→本跡	E

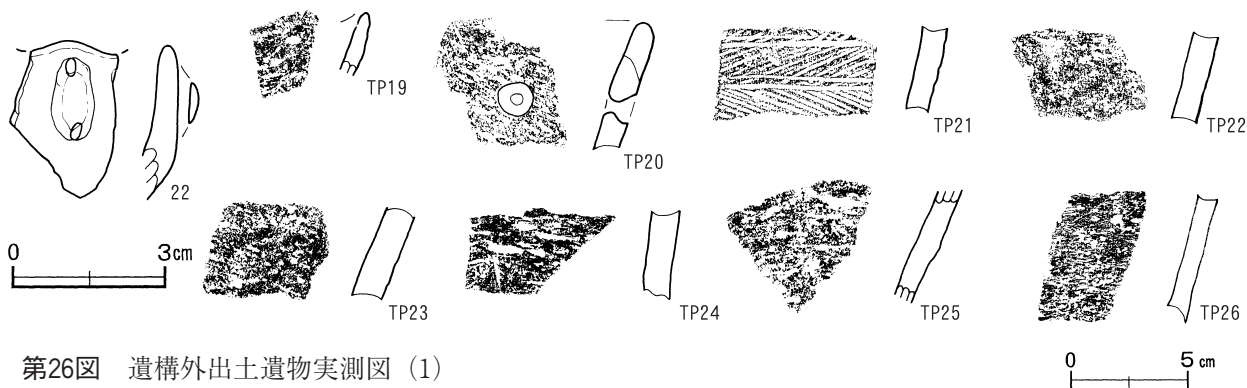
番号	位置	長軸方向 長径方向	平面形	規 模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備 考 (時期・旧→新)	分類
				長径×短径 (m)	深さ (cm)						
7	B 2 g6	—	円形	0.88×0.84	32	自然	皿状	外傾	—	近世	B
8	B 2 b1	N-76°-E	楕円形	0.88×0.61	18	自然	平坦	緩斜	—	近世	B
9	B 1 c0	N-31°-W	楕円形	0.59×0.51	36	自然	平坦	外傾	—	近世	B
10	B 2 g5	N-67°-W	楕円形	0.92×0.70	22	自然	平坦	外傾	—	近世	B
11	B 2 e8	N-10°-E	楕円形	0.81×0.74	61	人為	平坦	垂直	—	近世	B
12	B 2 e4	N-80°-W	楕円形	0.58×0.42	18	自然	皿状	緩斜	—	近世	B
13	B 2 e3	—	円形	0.63×0.61	29	自然	皿状	緩斜	—	近世	B
14	B 2 e3	—	円形	0.80×0.75	26	自然	平坦	外傾	—	近世	B
15	B 1 d7	—	円形	0.75×0.75	17	自然	平坦	緩斜	—	近世	B
16	B 1 e0	N-49°-W	長方形	0.54×0.41	17	自然	皿状	緩斜	—	近世	B
17	B 1 d9	—	円形	0.40×0.38	18	自然	皿状	緩斜	—	近世	F
18	B 2 d1	N-35°-E	長方形	2.50×0.97	28	人為	平坦	垂直	—	近世 SK 6→本跡	C
19	B 1 d9	—	円形	0.39×0.37	75	自然	柱状	垂直	—	近世	F
20	B 1 e7	—	円形	1.01×0.93	82	人為	有段	垂直	—	近世	D
21	B 1 b6	—	円形	0.98×0.95	83	人為	有段	垂直	—	近世 SK22→本跡	D
22	B 1 b6	N-17°-E	[楕円形]	(0.6)×0.56	0.8	自然	平坦	緩斜	—	近世 本跡→SK21	B
24	B 1 a6	N-48°-W	楕円形	1.34×1.02	26	自然	皿状	緩斜	—	近世 SK26・27・31→本跡	A
25	B 1 b0	N-28°-W	楕円形	0.58×0.47	20	自然	皿状	緩斜	—	近世	B
26	B 1 a6	N-33°-E	[楕円形]	[1.32]×[1.16]	151	自然	平坦	外傾	—	近世 SK27・31→本跡→SK24	A
27	B 1 a6	N-37°-E	長方形	1.82×[0.82]	65	人為	平坦	垂直	—	近世 SF1, SK31→本跡→SK24・26	C
29	B 1 a8	N-14°-W	楕円形	0.65×0.51	14	人為	平坦	外傾	—	近世 SF 1→本跡	B
30	A 1 j9	—	円形	0.54×0.52	20	自然	平坦	外傾	—	近世 SF 1→本跡	B
32	A 1 j9	N-32°-E	楕円形	0.75×0.64	33	自然	皿状	外傾	—	近世 SF 1→本跡	B
33	A 1 z	N-60°-W	[楕円形]	0.78×(0.22)	34	自然	平坦	外傾	—	近世 SF 1→本跡	B

表5 溝一覧表

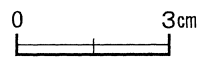
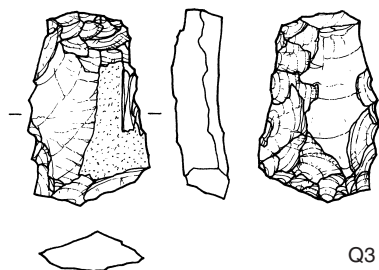
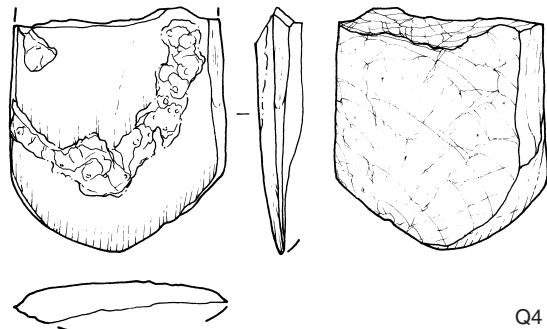
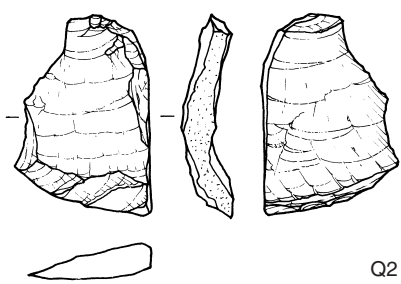
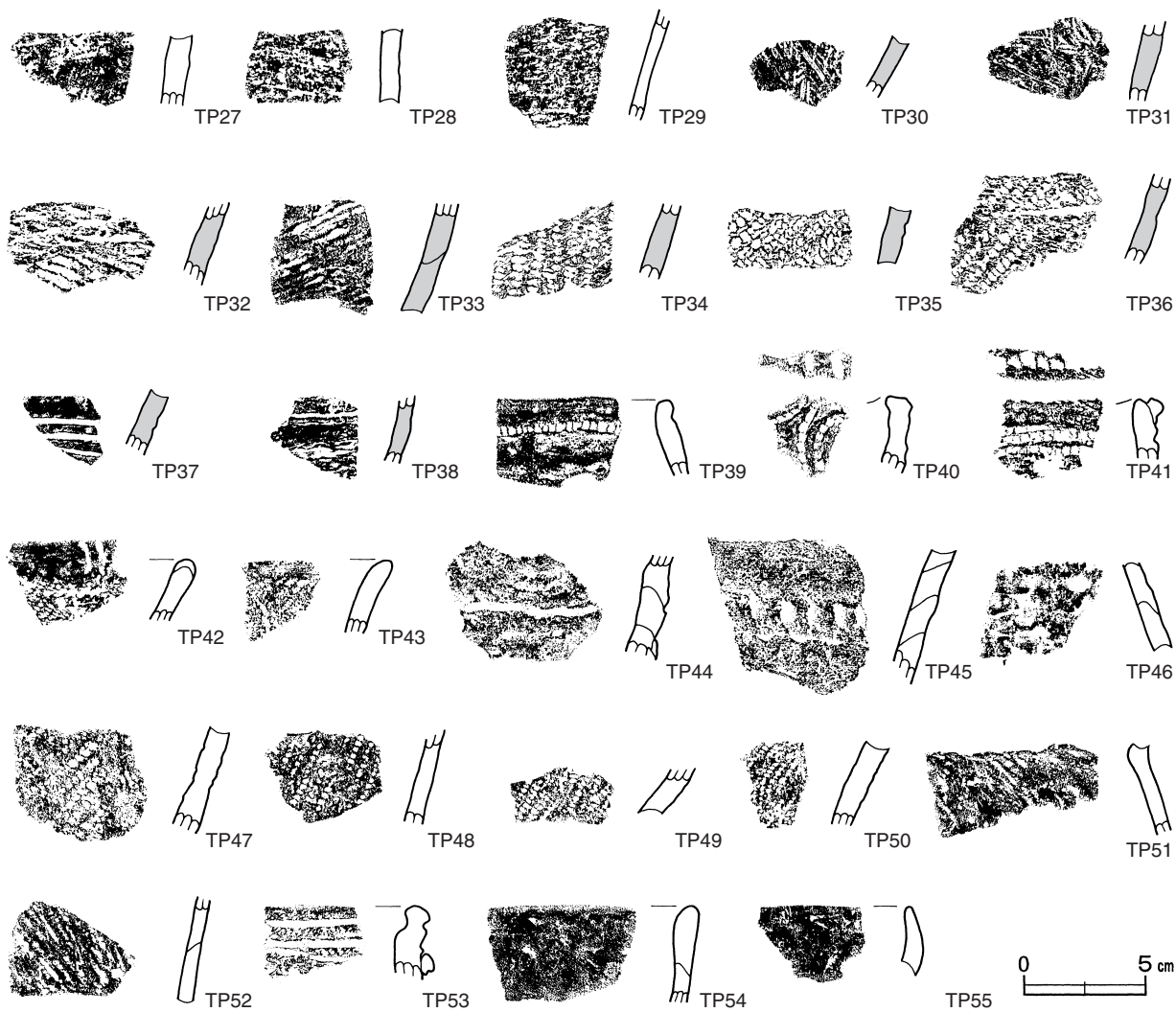
番号	位置	長軸方向	規 模				断面	覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備 考 (時期・旧→新)
			長さ (m)	上幅 (cm)	下幅 (cm)	深さ (cm)						
1	B 2 d8~ B 2 i6	N-30°-E	(21.82)	40~145	38~80	7~42	逆台形	自然	平坦	緩斜	—	近世
2	B 2 c6~ B 2 f4	N-37°-E	(13.8)	30~58	12~36	10~27	扁平U字状	自然	平坦	緩斜	—	近世
3	B 1 a6~ B 1 d5	N-25°-E	(14.45)	65~97	10~28	59~102	逆台形・ U字状	自然	有段	外傾	—	近世 SF 1→本跡

4 遺構外出土の遺物

今回の調査では、遺構に伴わない縄文時代の遺物が出土している。以下、特色ある遺物を抽出し、拓影図、実測図及び観察表で記載する。



第26図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第27図 遺構外出土遺物実測図 (2)

遺構外出土遺物観察表（第26・27図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	時期	備考
22	縄文土器	ミニチュア土器	—	(3.1)	—	石英・長石	にぶい褐	普通	小波状口辺部外面ナデ、縦方向に穿孔したボタン状突起を貼付	表土	不明	30% PL 8
TP19	縄文土器	深鉢	—	(2.5)	—	石英・長石	にぶい黄褐	普通	口辺部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	SI 5	早期・擦痕文系土器	
TP20	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	石英・長石・雲母	褐灰	普通	口辺部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	SI 3	早期・擦痕文系土器	補修孔 PL 8
TP21	縄文土器	深鉢	—	(3.5)	—	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面に沈線区画の斜行沈線文を充填する 内面ナデ	SI 3	早期・沈線文系土器	PL 8
TP22	縄文土器	深鉢	—	(3.5)	—	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	SI 4	早期・擦痕文系土器	
TP23	縄文土器	深鉢	—	(3.7)	—	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口辺部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	SD 1	早期・擦痕文系土器	
TP24	縄文土器	深鉢	—	(3.5)	—	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	表土	早期・擦痕文系土器	
TP25	縄文土器	深鉢	—	(4.5)	—	石英・長石・雲母	黄褐	普通	体部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	表土	早期・擦痕文系土器	
TP26	縄文土器	深鉢	—	(5.1)	—	石英・長石・雲母	黄褐	普通	体部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	表土	早期・擦痕文系土器	
TP27	縄文土器	深鉢	—	(2.9)	—	石英・長石・雲母	黄褐	普通	体部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	表土	早期・擦痕文系土器	
TP28	縄文土器	深鉢	—	(3.1)	—	石英・長石・雲母	明褐	普通	体部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	表土	早期・擦痕文系土器	
TP29	縄文土器	深鉢	—	(4.5)	—	石英・長石・雲母	明褐	普通	体部外面に擦痕文を施す 内面ナデ	表土	早期・擦痕文系土器	PL 8
TP30	縄文土器	深鉢	—	(2.6)	—	石英・長石・雲母・繊維	橙	普通	体部外面に貝殻痕文を施す	表土	早期・条痕文系土器	PL 8
TP31	縄文土器	深鉢	—	(3.4)	—	石英・長石・雲母・繊維	橙	普通	体部外面に貝殻痕文を施す	SI 4	早期・条痕文系土器	
TP32	縄文土器	深鉢	—	(3.4)	—	石英・長石・雲母・繊維	にぶい橙	普通	体部外面に無節縄文Rを施す 内面ナデ	SK 5	前期・黒浜式土器	
TP33	縄文土器	深鉢	—	(4.5)	—	石英・長石・雲母・繊維	橙	普通	体部外面に無節縄文Lを施す 内面ナデ	表土	前期・黒浜式土器	
TP34	縄文土器	深鉢	—	(3.2)	—	石英・長石・雲母・繊維	にぶい黄褐	普通	体部外面に粗く燃った単節縄文RLを斜位に施す 内面ナデ	SI 4	前期・黒浜式土器	
TP35	縄文土器	深鉢	—	(2.4)	—	石英・長石・雲母・繊維	にぶい褐	普通	体部外面に燃りの縵い単節縄文LRを施す 内面ナデ	SK 6	前期・黒浜式土器	
TP36	縄文土器	深鉢	—	(3.7)	—	石英・長石・雲母・繊維	にぶい褐	普通	体部外面に粗く燃った単節縄文LRを施す 内面ナデ	SD 2	前期・黒浜式土器	PL 8
TP37	縄文土器	深鉢	—	(2.8)	—	石英・長石・雲母・繊維	明赤褐	普通	体部外面に半截竹管による平行沈線文を施す 内面ナデ	表土	前期・黒浜式土器	PL 8
TP38	縄文土器	深鉢	—	(2.8)	—	石英・長石・雲母・繊維	にぶい橙	普通	体部外面に半截竹管による平行沈線文を施す 内面ナデ	SK14	前期・黒浜式土器	PL 8
TP39	縄文土器	深鉢	—	(3.2)	—	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	口辺部外面に棒状工具による押引文を施す	SK 6	中期・五領ケ台式土器	PL 8
TP40	縄文土器	深鉢	—	(3.1)	—	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	波頂部外面に棒状工具による1～2列の押引文を施す	表土	中期・阿玉台式土器	
TP41	縄文土器	深鉢	—	(2.5)	—	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口唇部に棒状工具による押引文、口唇部直下に隆帯を巡らし、下端に3列の押引文を施す	SK24	中期・阿玉台式土器	
TP42	縄文土器	深鉢	—	(2.4)	—	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口唇部刻み、口辺部外面に単節縄文LR・結節文を施す	表土	中期・阿玉台式土器	
TP43	縄文土器	深鉢	—	(3.0)	—	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口唇部刻み、口辺部外面に単節縄文LR・結節文を施す	SI 2	中期・阿玉台式土器	
TP44	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面に隆帯を巡らす 内面ナデ	SI 6	中期・阿玉台式土器	
TP45	縄文土器	深鉢	—	(5.5)	—	石英・長石・雲母	褐	普通	体部外面に鬘状の指頭痕を有する 内面ナデ	SI 7	中期・阿玉台式土器	PL 8
TP46	縄文土器	深鉢	—	(3.6)	—	石英・長石・雲母	褐	普通	体部外面に鬘状の指頭痕・輪積痕を有する 内面ナデ	表土	中期・阿玉台式土器	
TP47	縄文土器	深鉢	—	(4.5)	—	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面に単節縄文RLを縦位に施す	SI 5	中期・阿玉台式土器	
TP48	縄文土器	深鉢	—	(3.8)	—	石英・長石・雲母	褐	普通	体部外面に粗く燃った単節縄文RLを縦位に施す	表土	中期・阿玉台式土器	
TP49	縄文土器	深鉢	—	(1.8)	—	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面に単節縄文LRを施す	表土	中期・阿玉台式土器	
TP50	縄文土器	深鉢	—	(3.6)	—	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面に単節縄文LRを施す	SI 6	中期・阿玉台式土器	
TP51	縄文土器	深鉢	—	(3.8)	—	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面に無節縄文Rを施す	SI 5	中期	
TP52	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面に無節縄文Rを施す	表土	中期	
TP53	縄文土器	深鉢	—	(3.0)	—	石英・長石・雲母	褐	普通	口辺部外面に棒状工具により平行沈線文と貼瘤、内面に沈線・ナデを施す 地文は単節縄文RL	SI 6	後期	PL 8
TP54	縄文土器	深鉢	—	(3.9)	—	石英・長石	明褐	普通	無文、内面ナデ	試掘	不明	
TP55	縄文土器	深鉢	—	(2.8)	—	石英・長石	明褐	普通	無文、内面ナデ	表土	不明	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	石質	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	剥片	4.0	2.7	1.0	8.1	凝灰岩	チャート	縦長剥片、背面に同一方向の剥離痕、下端部に背面側からの微細剥離痕を有する 打面は複剥離面打面	SI 4	PL 8
Q 3	2次加工を有する剥片	3.8	2.4	1.1	8.7	凝灰岩	チャート	縦長剥片を素材とし、側縁に両面から調整を施す 打面は単剥離面打面	SK5	PL 8
Q 4	磨製石斧	(4.9)	(4.2)	1.0	(28.5)	凝灰岩	緑泥片岩	全面研磨調整、欠損後上部に階段状の剥離調整を施す	SI 5	PL 8

第4節 ま と め

調査の結果、縄文時代の陥し穴3基、炉跡1基、遺物包含層1か所、古墳時代の竪穴住居跡6軒と土坑1基、中世以降の方形竪穴建物跡1棟、道路跡1条、溝3条、土坑29基を確認した。当遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、なかでも古墳時代前期の集落跡が中心であることが明らかとなった。ここでは、土地利用の変遷を概観し、特に古墳時代前期の住居形態などについて検討したい。

1 土地利用の変遷

当遺跡における最初の活動痕跡は、縄文時代早期に遡ることが遺物包含層の調査によって明らかとなった。現在、町域における縄文時代の遺跡は10か所ほどが確認されている。当遺跡からは早期中葉から中期中葉までの縄文土器が出土し、量的には早期中葉の擦痕文や沈線文系土器群と、中期中葉の阿玉台式土器群が他を凌駕している。近隣には早期の逆瀬遺跡をはじめ、中期の中峯遺跡や小曾納川流域の五行台遺跡などがあるため、当遺跡は、断続的に早期中葉から中期中葉まで、園部川水系に集落を構えた集団の活動領域に組み込まれ、狩猟場やキャンプサイトとして利用されたと考えられる。

町域や周辺地域においては、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺跡が急激に増加する傾向から、石岡・新治台地を開析している巴川や園部川、恋瀬川流域の低地開発が、当該期に本格的に開始されたと考えられる。当遺跡では古墳時代前期に集落が出現しており、その眼下の二つに分流する花野井川流域に広がる低地が水田経営の好適地であり、谷津田や低地の開発を担った集団が居住していたものと想定される。また、集落形成の主な要因は、恵まれた水利と低地に突き出した台地の形状から、防御性にも優れていたことも大きいと想像される。さらに、集落が古墳時代前期に突如形成されたことは、水田経営や低地開発という生産的・経済的な要因だけではなく、本格的な階級社会の成立期という緊張した社会情勢の中で、勢力の拡大に伴う制圧や移住など、政治的な要因も極めて大きいと考えられる。

その後は、中世以降に方形竪穴建物や道路が構築されているだけであり、その他の土坑や溝は、大半が近世以降の耕作に伴う土地利用の痕跡と考えられる。

2 古墳時代前期の住居形態

確認された住居跡は、いずれも出土遺物が少ないため、具体的な集落変遷を追求することが難しい状況にある。そこで周辺の代表的な古墳時代前期の集落跡と、土器編年と住居形態の変化を総合的に比較することで、当遺跡をはじめ、霞ヶ浦北域に位置する遺跡の集落変遷について考えてみたい。取り上げる遺跡は次の三遺跡である。南小割遺跡¹⁾は、東茨城郡茨城町大字駒渡に所在する潤沼川左岸の標高約24~26mの台地上、並木新田台遺跡²⁾は、東茨城郡美野里町大字大谷に所在する園部川の左岸の標高23mの台地上、外山遺跡³⁾は、石岡市大字東田中に所在する恋瀬川左岸の標高約24mの台地上にそれぞれ位置しており、出崎遺跡との距離は順に約9.9km、約2.8km、約6.9kmで、確認された古墳時代前期の住居跡は、126軒、15軒、8軒である。なお、2003年に浅井哲也氏は茨城県の古墳時代前期6期区分と南小割遺跡の土器編年⁴⁾を示しており、本報告における時期区分の大枠をなしている。また、本報告書内では浅井編年を表6のように対応させ、以下の分析における時期の判定については、浅井編年を基に先行研究の諸説⁵⁾を加味して判断している。

次に住居形態を分析するためには、本来は住居の規模や機能、住居同士のセット関係などの検討が必要であるが、時期的な変化を捉えることに主眼を置くため、主に内部施設のあり方に注目し、南小割遺跡で確認され

表6 時期区分対応表

浅井編年		本報告書内		
I期	250~275年	古墳時代前期前半	古墳時代前期前葉	3世紀中葉～3世紀末葉 (3世紀後半)
II期	275~300年			
III期	300~325年		古代時代前期中葉	
IV期	325~350年			
V期	350~375年	古墳時代前期後半	古墳時代前期後葉	4世紀中葉～4世紀末葉 (4世紀後半)
VI期	375~400年			

た古墳時代前期の住居跡126軒の内、時期が判定できない住居跡を除いた58軒を対象に分類を試みた。その結果が表7及び第28図で、A～N類の14タイプに区分できた。

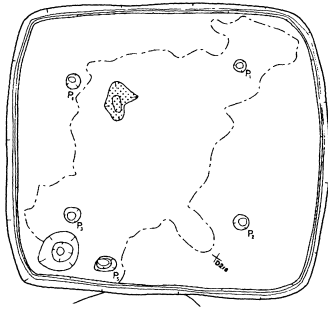
表7 古墳時代前期の住居形態の分類（南小割遺跡）

分類	内部施設				
	炉	主 柱 穴	出入口施設ピット	貯 蔵 穴	間仕切り溝
A類	中央部壁寄り	4か所	1か所	コーナー部1か所	無
B類	中央部壁寄り	4か所	1か所	コーナー部1か所	有
C類	中央部壁寄り	4か所	1か所	コーナー部・コーナー部付近2か所	無
D類	中央部壁寄り	4か所	1か所	コーナー部・コーナー部付近2か所	有
E類	中央部壁寄り	コーナー部付近4か所	1か所	無	無
F類	中央部壁寄り	コーナー部付近4か所	1か所	無	有
G類	中央部壁寄り	4か所	1か所	無	無
H類	中央部壁寄り	4か所	1か所	無	有
I類	中央部壁寄り	無	1か所	コーナー部1か所	無
J類	中央部壁寄り	無	1か所	コーナー部1か所	有
K類	中央部壁寄り	無	無	コーナー部1か所	無
L類	中央部壁寄り	無	1か所	無	無
M類	無	無	無	コーナー部1か所	無
N類	無	無	無	無	無

なお、A～D類は間仕切り溝の有無と貯蔵穴の数、E・F類、G・H類、I・J類は間仕切り溝の有無で細分したもので、大きくはA～D類、E・F類、G・H類、I・J類、K類、L類、M類、N類の8類となる。これらの分類は一遺跡での検討であるため、その有効性は今後も検証していかなければならないが、限定された地域や流域ごとの小範囲に適用することは可能と考える。上記の三遺跡と当遺跡で確認された6軒を加えた計81軒の住居跡について、南小割遺跡における住居形態の分類をもとに、時期別の出現傾向をまとめたものが表8である。A～D類は前期を通して見られるタイプであり、特に前期後葉になるとC・D類の貯蔵穴を複数有するタイプが出現する。G～L類は、I～V期まで一般的に見られるが、前期後葉頃には消滅あるいは出現率が極めて低いタイプで、貯蔵穴を設けないタイプは消滅していく傾向にあると指摘できる。また、間仕切り溝を有するB・D・F・H類は前期中葉以降に出現する傾向がうかがえ、E・M・N類は、前期前葉から中葉に見られ、前期後葉にはほとんど残らないタイプである。

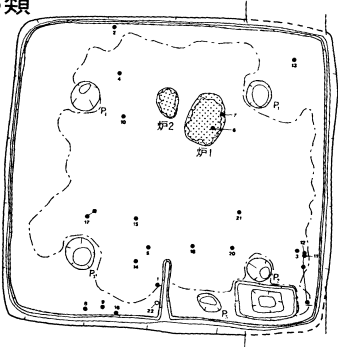
以上のことを踏まえ、出崎遺跡の集落変遷（第29図）を見てみると、前期前葉（浅井編年：I～II期）はI類の第1号住居跡のみで、前期中葉（浅井編年：III～IV期）はK類の第2～4号住居跡の3軒である。前期後葉（浅井編年：V～VI）はK類の第5号住居跡であり、時期不明がK類の第6号住居跡である。当住居跡のように炉が中央部に位置している例は、南小割遺跡のI・J類や、外山遺跡のI期の住居跡にも見られることか

A類



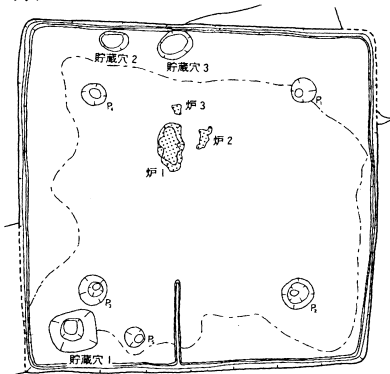
SI 136

B類



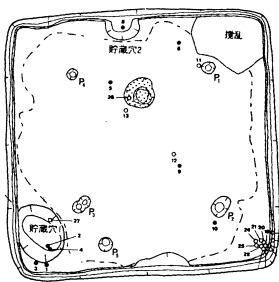
SI 146

C類



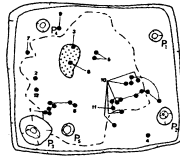
SI 88

D類



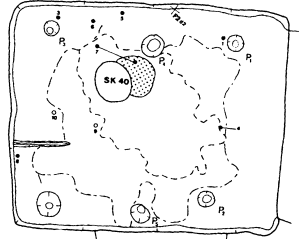
SI 108

E類



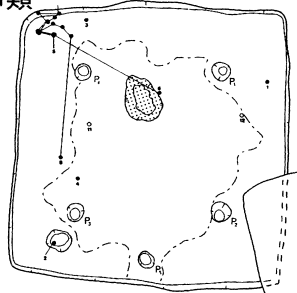
SI 35

F類



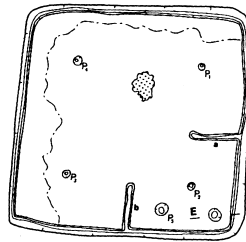
SI 61

G類



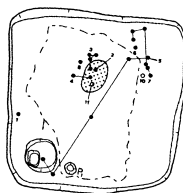
SI 27

H類



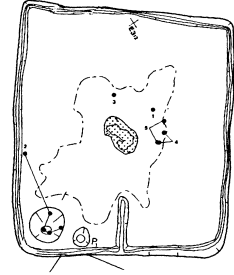
SI 42

I類



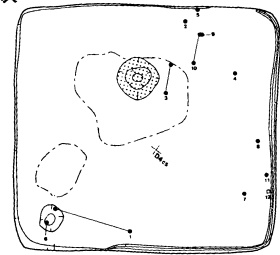
SI 106

J類



SI 85

K類



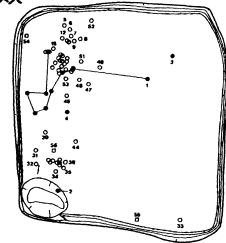
SI 176

L類



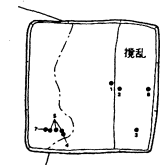
SI 96

M類



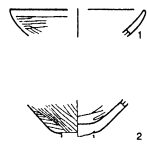
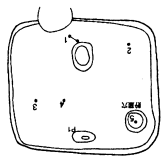
SI 171

N類



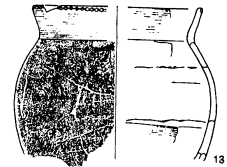
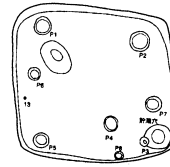
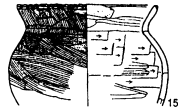
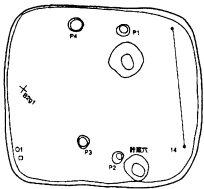
SI 158

第28図 南小割遺跡における住居形態の分類〈S = 1/120〉



出崎遺跡・SI 1

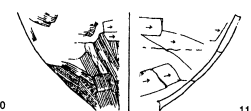
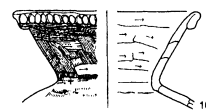
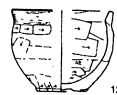
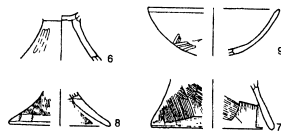
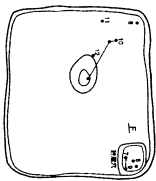
I 期



SI 4

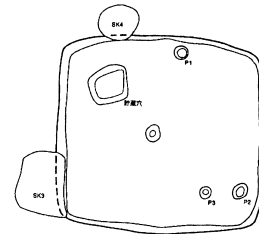
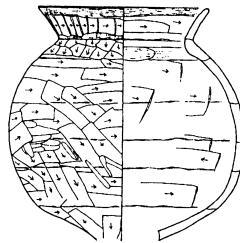
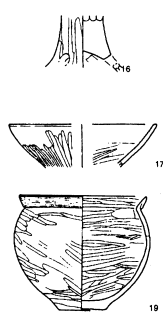
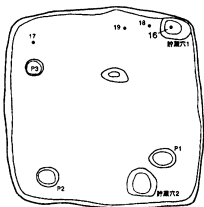
SI 3

II 期~III 期



SI 2

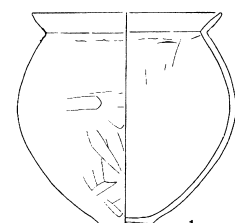
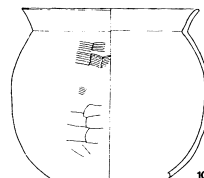
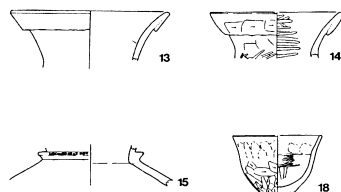
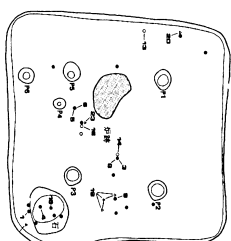
IV 期



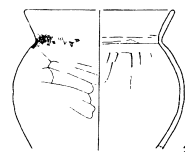
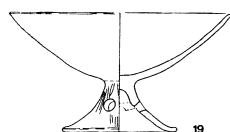
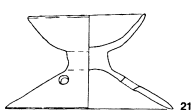
SI 5

V 期

SI 6

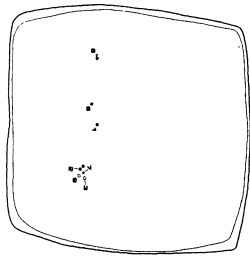


並木新田台遺跡・SI 1

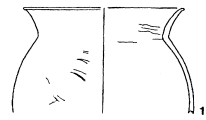


II 期

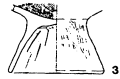
第29図 出崎・並木新田台遺跡における住居跡の変遷 <住居跡：S = 1/120, 土器：S = 1/8 >



SI 10



1.1



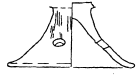
3



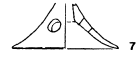
8



2

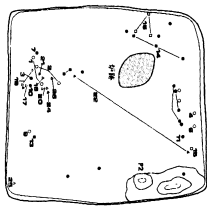


6



7

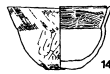
III期



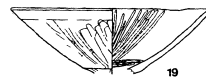
SI 9



4



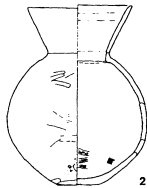
14



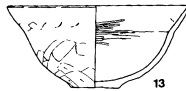
19



21



2



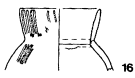
13



18



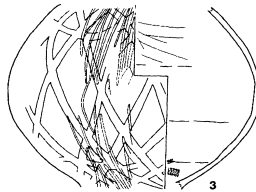
22



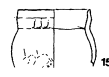
16



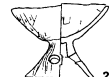
11



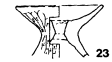
3



15

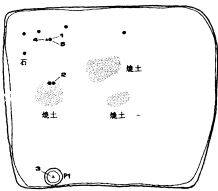


20



23

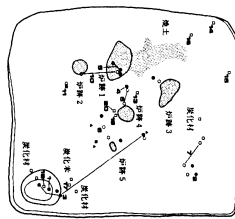
IV期



SI 2



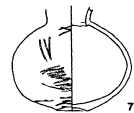
3



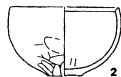
SI 6



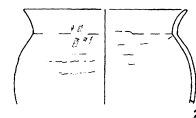
8



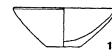
7



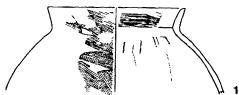
2



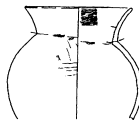
2



11

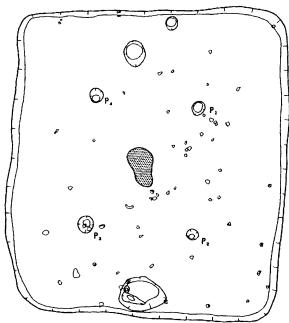


1



5

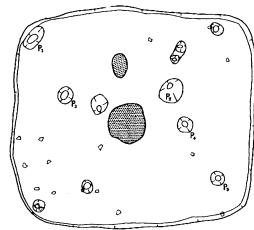
V期



外山遺跡・SI 2



1



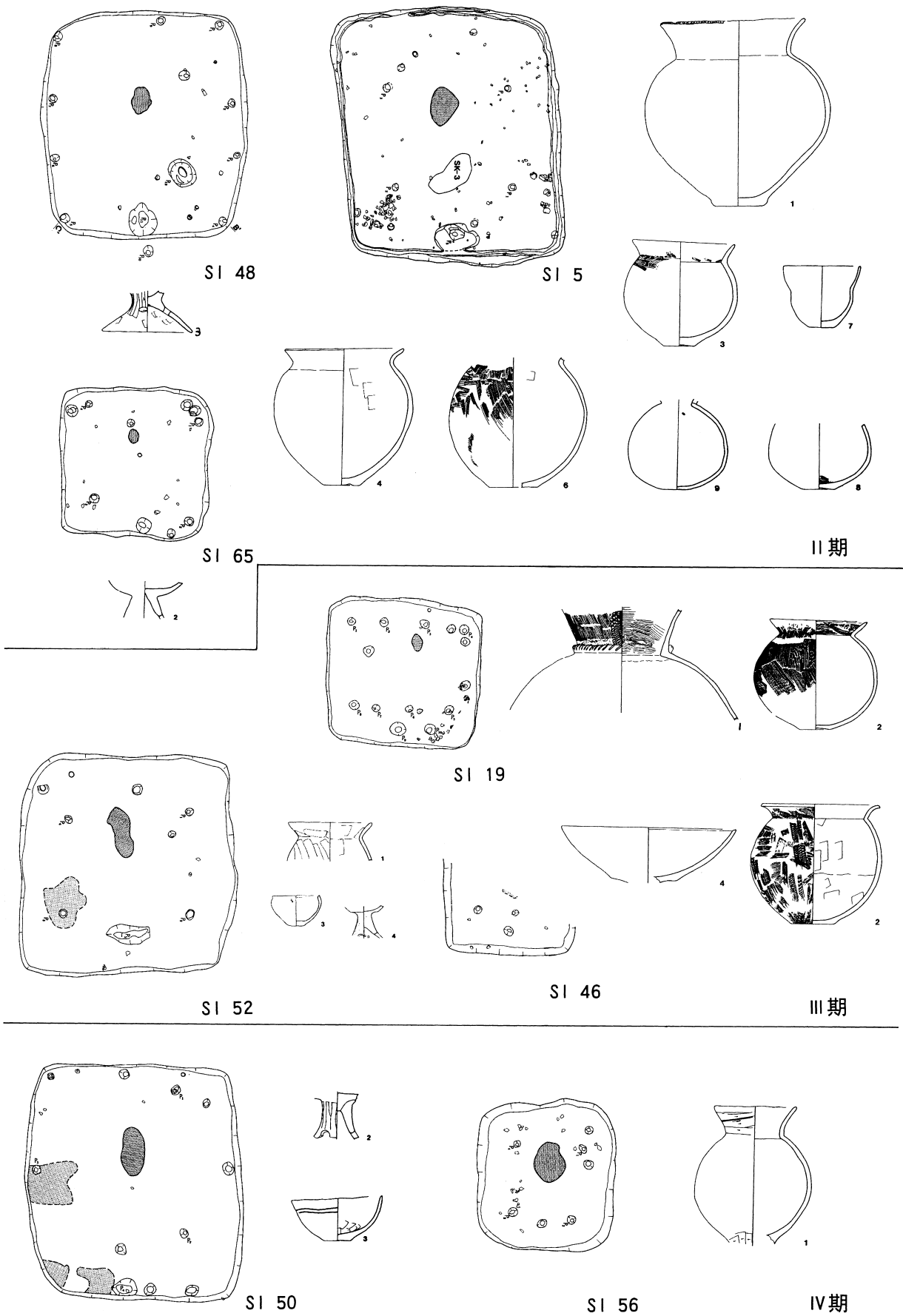
SI 64



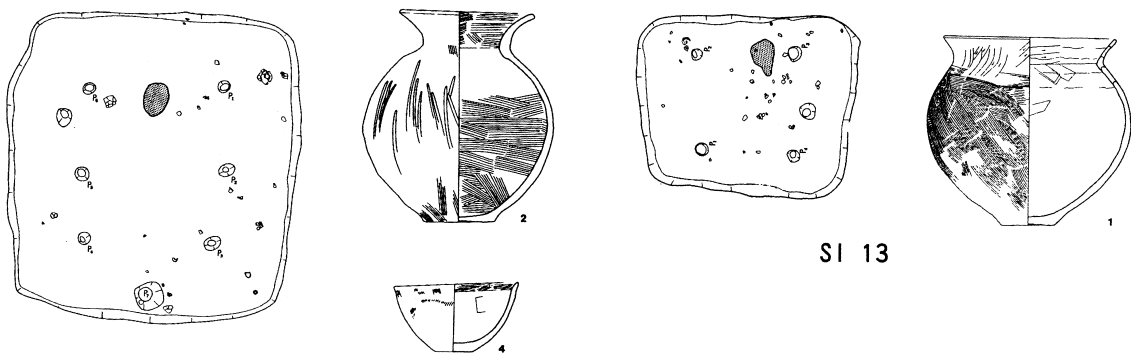
2

I期

第30図 並木新田台・外山遺跡における住居跡の変遷〈住居跡：S = 1/120, 土器：S = 1/8〉



第31図 外山遺跡における住居跡の変遷 (1) <住居跡: S = 1/120, 土器: S = 1/8 >



SI 51

SI 13

第32図 外山遺跡における住居跡の変遷 (2) <住居跡: S = 1/120, 土器: S = 1/8 >

IV期

表8 時期別による住居形態の出現傾向 (南小割・並木新田台・外山・出崎遺跡)

時期	分類														
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	
I期: 250~275年	○				○		○			○					
II期: 275~300年	○				○		○		○		○	○		○	
III期: 300~325年		○					○		○		○		○		
IV期: 325~350年	○				○		○	○	○	○	○	○	○		
V期: 350~375年			○	○			○		○		○	○			
VI期: 375~400年	○		○			○									
南小割	5	9	4	4	3	1	5	1	11	3	7	2	2	1	58
並木新田台	1										3			1	5
外山					3		6					3			12
出崎									1		5				6
合計	6	9	4	4	6	1	11	1	12	3	15	5	2	2	81
出現率 (%)	7	11	5	5	7	1	14	1	15	4	19	6	4	4	

ら、前期前葉から中葉の可能性を指摘しておきたい。なお、並木新田台遺跡と外山遺跡の住居跡の変遷については、第29~32図の変遷図を参照されたい。当遺跡の周辺には石岡市松延遺跡⁶⁾や新治郡千代田町市川遺跡⁷⁾、東茨城郡茨城町石原遺跡⁸⁾など、古墳時代前期の住居跡が確認された遺跡が数多く存在している。本来、集落の規模や性格を一律に論じることには問題があるが、今回は涸沼川流域における大規模な集落跡である南小割遺跡の住居形態を基に分析を行った。今後は一定の地域や流域ごとの中核的な集落跡と、その分派的な小規模の集跡落との様相の違いにも注目しながら、比較対象の資料を増やし、土器編年と住居形態の変化の総合的な分析を通して、集落変遷はもとより、集団間の交流や地域性についても明らかにしていきたい。

3 第1号住居跡出土の小型壺について

ここで取り上げる小型壺は、主に南関東地方の弥生時代後期から古墳時代前期にかけて出土している特殊な壺で、比田井克仁氏によって類例と形態について詳細な分析がなされている⁹⁾。そこで、当遺跡の第1号住居跡から出土した小型壺の出土状況と型式分類について、比田井氏の分類に従って検討したい。

まず、第1号住居跡から出土した小型壺は3点で、いずれも床面よりやや上位から、散在した状況で出土している。1点だけが北西コーナー部に位置する貯蔵穴の上面から出土している。第1号住居跡は、中央部の南側に炉を設け、その対峙した位置に出入口施設に関連するピットが位置しているため、1点は比田井氏の出土位置の分析で最も多いとされる住居跡右下コーナー部分からの出土例に該当することになる。比田井氏は、住居

跡右下コーナー部は特別な扱いを受けたエリアと考え、そこからの出土例の多い小型壺は、神人共食の役割を持っていたと類推している。次に型式分類については、比田井氏のB類（「胴部の張り出しは乏しく、頸部の屈曲は弱く、全体的に胴部最大径より器高の方が高く、細長く見える。外面調整はミガキ・ナデ・刷毛調整が施されるが、刷毛調整がほとんどを占める」¹⁰⁾）に当てはまり、短くくの字に屈曲するB2類の様相に適合している。そして、B2類は古墳時代前期前葉に出土のピークが見られ、第1号住居跡から出土した高坏との時期的な整合性も認められる。

比田井氏は小型壺が出現した意義について、「集落紐帯を意味する屋内祭祀儀礼にかかわる器」であり、その役割は「集落の紐帯を通した西方社会の浸透に対する、伝統性に基づいた在地の意思表示であり、抵抗でもあった」¹¹⁾と結論づけている。さらに、小型壺のB2類は弥生時代後期から古墳時代前期を画するメルクマールにもなると指摘している。以上、比田井氏の卓越した先行研究を参考にしながら、当遺跡出土の小型壺について紹介した。今後は県内における資料の集成を通して、主体的に分布している南関東の諸地域との比較検討を進めていきたい。

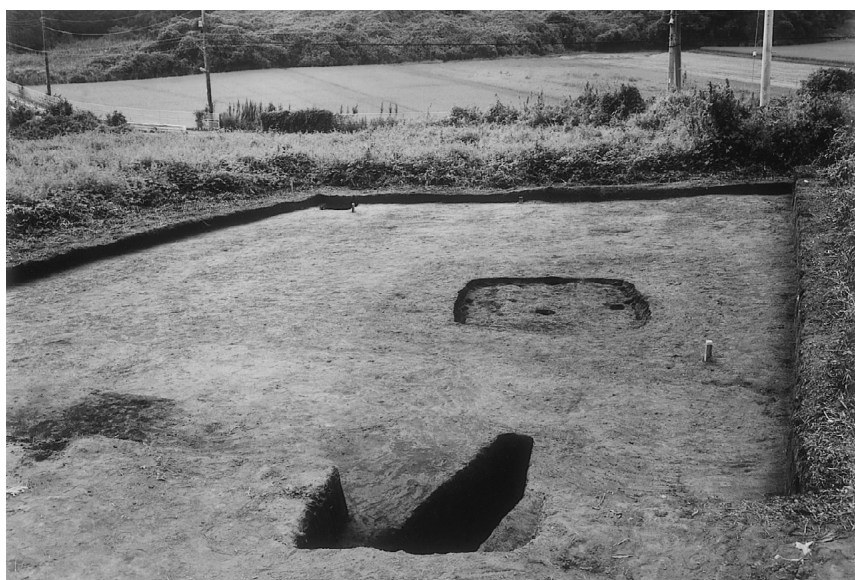
註

- 1) 中村敬治・江幡良夫「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書 南小割遺跡 権現堂遺跡親塚古墳 後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集 1998年3月
- 2) 佐々木義則・野坂俊之・海老沢稔『並木新田台遺跡』茨城県美野里町教育委員会 1988年3月
- 3) 山本静男「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告 兵崎遺跡 大谷津A遺跡 対馬塚遺跡 大谷津B遺跡 大谷津C遺跡 外山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』Ⅷ 1982年 3月
- 4) 浅井哲也「茨城県における古墳時代前期の土器」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集－』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年4月
- 5) 鈴木幹男『松戸市諏訪原遺跡』松戸市教育委員会 1974年3月
滝澤 亮『土器が語る－関東古墳時代の黎明』古墳時代土器研究会 1997年5月
加藤修司「房総地方における前期古墳の展開－重要遺跡確認調査の成果と課題4－土器編年案」『研究紀要』21 千葉県文化財センター 2000年9月
片根義幸・藤田直也「古墳時代前期の甕形土器について－栃木県における甕形土器の形態と消長－」『研究紀要－埋蔵文化財センター創立10周年記念論集－』9 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2001年3月
高花宏行「印旛地域における古墳時代開始期の土器様相」『印旛郡市文化財センター研究紀要』2 印旛郡市文化財センター 2001年3月
石丸敦史「野方台遺跡の再検討（1）－古墳時代前期その1－」『専修考古学』第9号 専修大学考古学会 2002年11月
鈴木芳英「古墳出土土器編年のための集落出土土器編年」『栃木県考古学会誌』第23集 栃木県考古学会 2002年12月
石丸敦史「下野地域における古墳時代前期の土器様相－とくに住居跡における土器構成について－」『法政考古学』第30集 法政考古学会 2003年3月
中山英樹「栃木県佐野市松山・エグロ遺跡の検討」『研究紀要』11 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2003年3月
鈴木芳英「小貝川・五行川流域における古墳出現期の様相」『唐澤考古』23 2004年5月
- 6) 倉本富美男・山本貴之「常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（I） 志筑遺跡外」『茨城県教育財団文化財調査報告』第5集 1980年3月
- 7) 西宮一男・鈴木幹男『千代田村埋蔵文化財調査報告書（I） 市川遺跡、根崎遺跡、清水並木経塚』千代田村教育委員会 1969年2月
- 8) 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書I 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第163集 2000年3月
- 9) 比田井克仁「小さな壺から－西方社会へのささやかな抵抗－」『史館』第24号 1993年9月
- 10) 註9)に同じ
- 11) 註9)に同じ

写 真 图 版



調査区全景



調査区全景(西部)

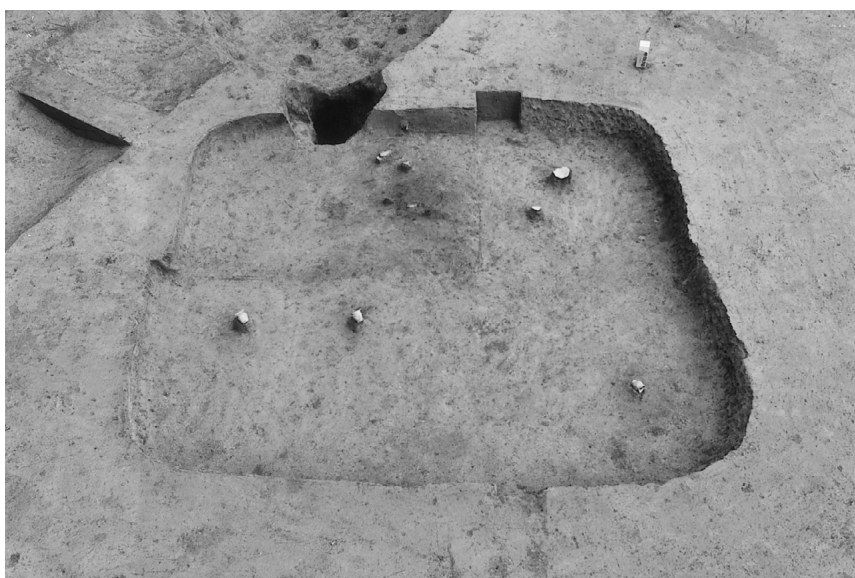


基本土層断面

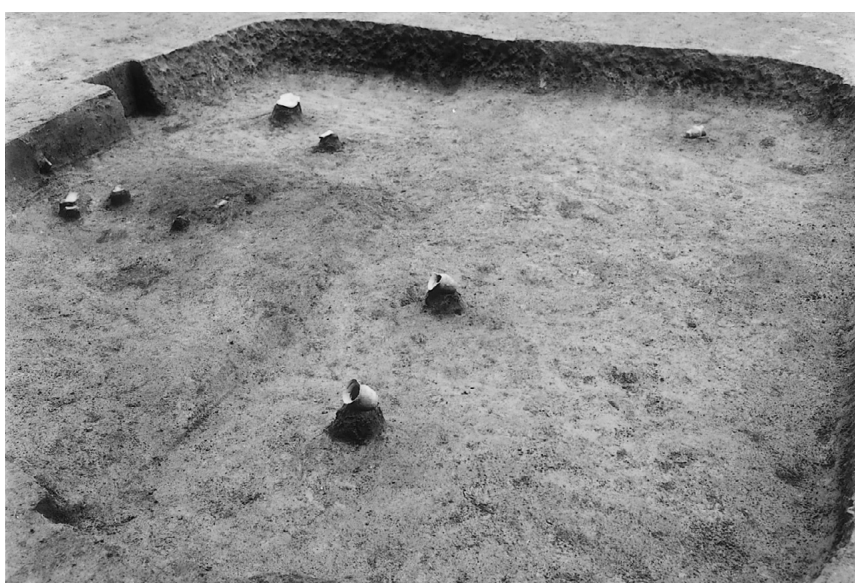
PL 2



第 1 号住居跡
完 掘 状 況



第 1 号住居跡
遺物出土狀況



第 1 号住居跡
遺物出土狀況

第 2 号住居跡
完 掘 状 況



第 2 号住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 2 号住居跡
遺 物 出 土 状 況



PL 4



第 3 号住居跡
完 掘 状 況

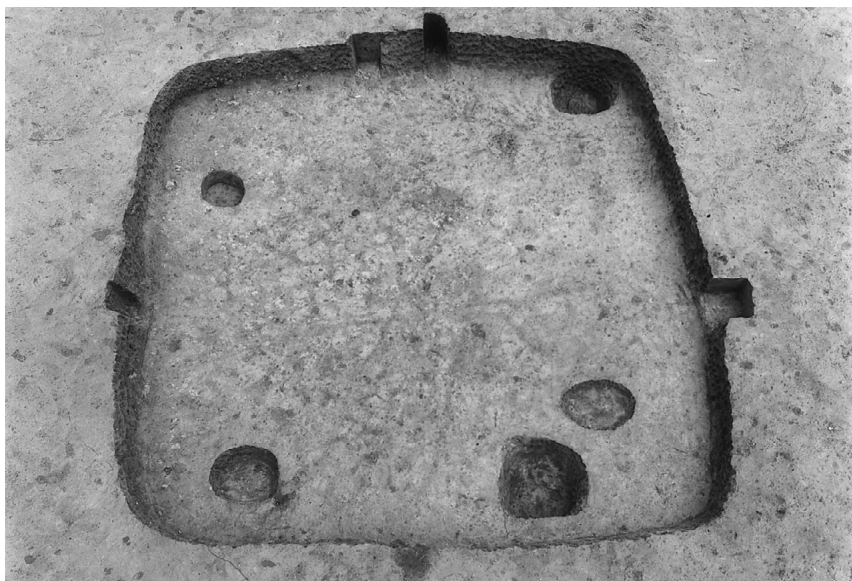


第 3 号住居跡
遺 物 出 土 状 況

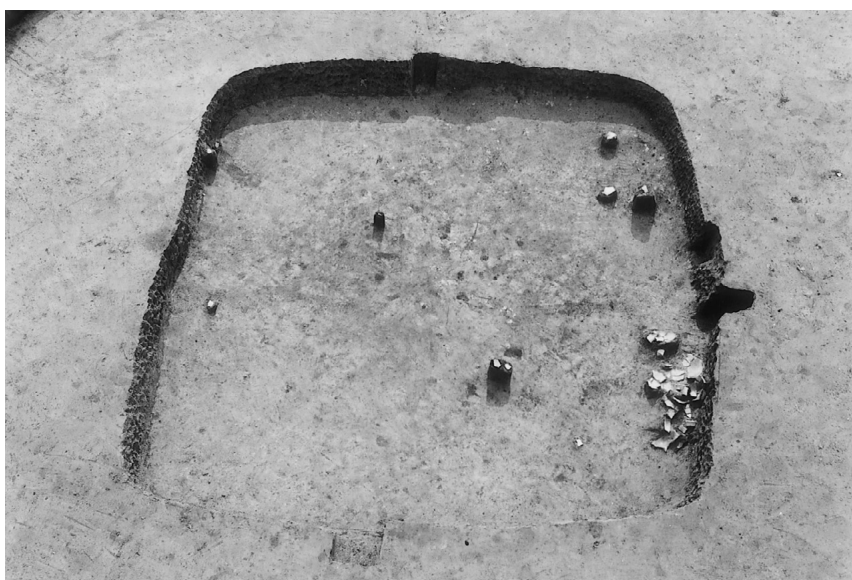


第 4 号住居跡
完 掘 状 況

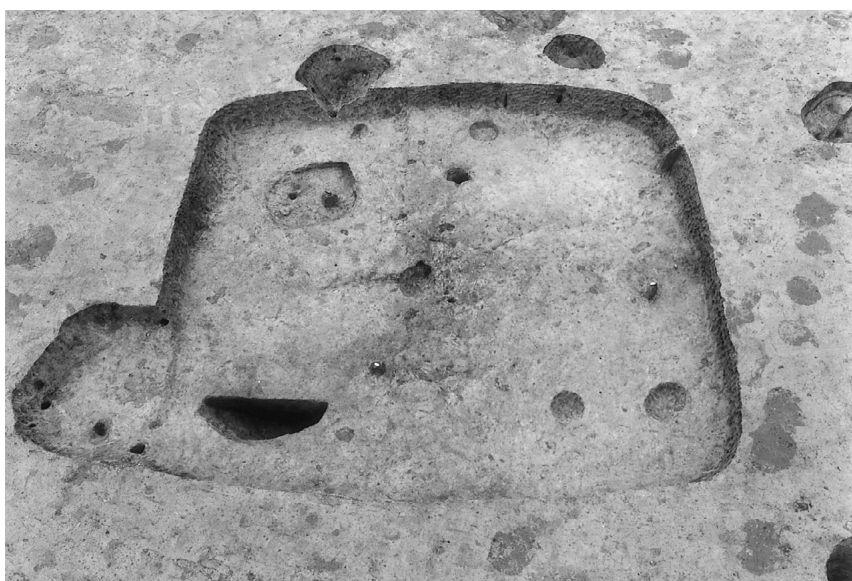
第 5 号住居跡
完 掘 状 況



第 5 号住居跡
遺物出土狀況



第 6 号住居跡
遺物出土・完掘狀況





第 1 号方形竖穴建物跡完掘状况



第 1 号土坑完掘状况



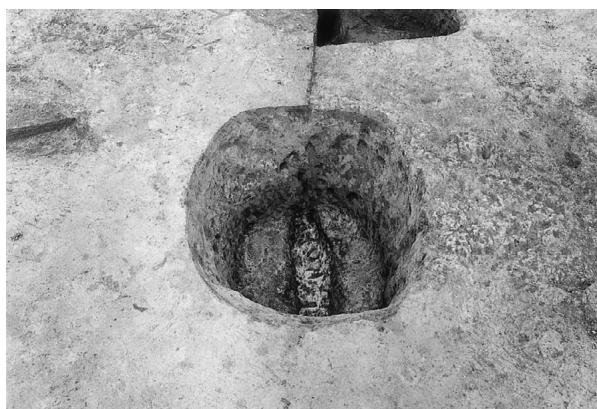
第 2 号土坑完掘状况



第 3 号土坑完掘状况



第 4 号土坑完掘状况



第 5 号土坑完掘状况



第 6 号土坑完掘状况



第 9 号土坑完掘状况



第18号土坑完掘状况



第27号土坑完掘状况



第28号土坑完掘状况



第35号土坑完掘状况



第1号沟完掘状况



第2号沟完掘状况



第3号沟完掘状况



第1号道路迹完掘状况



第1～5号住居跡，包含層・遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第246集

出 崎 遺 跡

一般県道上吉影岩間線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成17（2005）年3月22日 印刷

平成17（2005）年3月25日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
T E L 029-225-6587

印刷 いばらき印刷株式会社
〒319-1112 茨城県那珂郡東海村村松字平原3115-3
T E L 029-282-0370